紫夫人の大病の爲めに、朱雀院の法皇の賀宴も延びて秋といふ事になつて居たが、八月は左大將の忌月で、音樂の方を此人が受持つのに不便であつたし、九月は又朱雀院の太后のお崩れになつた月でこれも駄目で、十月にと六條院は思つて居られたのが女三の宮の勝れぬ健康のために又延びて了つた。女二の宮から捧げられた賀は其月にあつた。太政大臣が後援になつて豪奢に行はれた。引籠つて居た衛門督も初めて外出したのであつた。然し其後は又病床に親しむやうであつた。

女三の宮は煩悶ばかりされる中に、月が重つて、ますます體もお苦しいやうであつた。朱雀院も姙娠の事はお聞きになつて居た。長く六條院は二條の院の方へ別れて居て宮をお訪ねになるのも稀であることを朱雀院に申上げた者もあつたので、御姙娠は唯事の結果で無いのではあるまいかと、ふとお思ひになつた。輕薄な女房の仕業などから不快な事件があつたのでは無からうかとも想像遊ばされた。一切をお捨てになつた御心境にも、尙ほ子を思ふ愛情だけは影を殘して居た。

「御無沙汰をして居る中に月日が經つといふ事も此世の悲しみです。あなたが普通の體で無い事は聞きましたが、今は如何ですか。恨めしがる樣子を見せたり、妬みを告げたりするのは品のいいものではありません。」

この手紙が朱雀院から宮に屆いた。院もこれを御覽になつた。宮に祕密のある事は御存知無く、自分の不誠意とばかり朱雀院は解釋しておいでになるのであらうと、心苦しく思はれた。

「御返事は何うお書きになりますか。心苦しいお手紙で、私が責められる樣な氣がします。何か誰かゞ申上げたのでせう。」

恥ぢて顏をお背けになる宮の姿はいぢらしかつた。

「こんな事をあなたに云つて了はうとは思つて居なかつたのですが、院が私を賴み甲斐の無い者に思召すだらうと思はれるのが苦痛ですからね。深いお考へも無く、いゝ加減な人の言葉でお動きになるあなたには、私の眞實の愛が淺いものにも見えるのでせう。然し院の御在世中だけは、これを幸福な道としてお撰びになつた事ですから、老いた良人の私を餘り無視するやうな

事は慎んで頂き度いと思ふ。未だに私は出家も出來ずに居ますが、此世の欲望が捨てられないのでは無く、御出家遊ばす折にあれ程に院がお托しになつたあなたを捨てゝ行くやうな行動がとれなかつたのです。院の御壽命ももう餘り長くはないらしく、體もお弱りになつて心細い御様子ですから、悪い事を御耳に入れて心配をおかけしては不可けません。來世のお妨げをする事をしてはあなたの罪も大きくなりますよ。」

涙を零す宮を見て、六條院もお泣きになつた。餘計な事を云ふ老人だと思ふでせうが、などと院は自身で墨を磨りなどなすつて返事を書かせようとされた。宮は手が慄へてお書きになれない。あの衛門督の手紙の返事は、こんなに澁らずにお書きになつたのかと思ふと、又反感も覺えたが、院は言葉などをお授けになつてお書かせになつた。

「賀も延び延びになつたが、十一月はあなたのお母様の祥月でせう。十二月は餘りに押しつまつて宜しく無いし、あなたの體も見苦しくなるでせうから、久し振りに御覽に入れるのも何うかと思はれますが、さうさう延ばしても居られません。餘り物思ひもしないで、痩せたお顏を

先づ直すやうにするのですね。」

と、流石に可愛くは思召した。

衛門督は何んな催し事にも必要な人物としてお招きになり、相談相手にも今迄は遊ばして來たのであるが、今度に限つて何の仰せも無かつた。人が不審を起さうとも思はれたが、其人が來て、辱めを受けた老人である自身の見られるのも不愉快であるし、見れば又自分の心も平靜ではあり得なからうと、お呼びにもならなかつた。これは何か理由があらうと左大將だけは豫想した。多感な男であるからとは思つたが、衛門督がそれ程の不祥な事を惹起したとは思ひも及ばなかつた。

十二月になつた。十幾日が、法皇の賀の日と定められ、六條院の中は其準備で騷がしかつた。紫夫人も、賀宴の樂の練習を見度くて二條院から戻つて來た。女御も歸つて居た。此度も男宮が生れたのであつた。試樂の日には右大臣の夫人も六條院へ來た。左大將は東北の御殿で其前に既に毎日練習させて居たから、花散里夫人は出なかつた。衛門督を此日などに除外するのは

惜しくもあり、又人の不審を引く事を寧ろ恐れて、院はお呼びになつたが、病氣が重いのでと云つて、衛門督は出て來なかつた。顏の合し難い事もあるのであらうと院は重ねて使をお遣りになつた。

父の大臣も、無理をしても參つたら何うだ、何か含む所がある樣に院が思召すかも知れないからと勵めもするので、辛い氣持を抱きながら衛門督は六條院へ參つた。未だ他の高官達は來て居なかつた。これ迄のやうに院は御簾を隔てゝお會ひした。非常に痩せた衛門督は顏色も惡かつた。平生も華かな美しさは弟達の方に多くて此人は落付いた靜な方であつたが、今日は殊におとなしく、內親王の配遇者として相應しかつた。然しそのした事は憎惡せずには居られないと院は思召したが、さり氣なく、

「長く逢はなかつたね。病人や何かの爲めに此處に居る內親王がする院の賀も延びて居たが、今月いよいよする事にした。それも唯孫達の數なども殖えて居るからそれでも御覽に入れようと思つて、舞の稽古をさせ初めた。拍子が合ふか試して見るのだが、指導を賴むに誰かをと思

ふと矢張りあなたに面倒を見て貰ふ事になつて了ふ。」

院の御樣子には今迄と變つた所も無かつた。恥しさに、中納言は顏の色の變るのが自分にも分つた。

「女王樣も宮樣もお惡いといふ事は伺つて居りましたが、私も前から御座いました脚氣が頻りに起りまして歩行も困難で御座いましたから失禮致して居りました。御所へも上らず、世の中からすつかり隔離された樣な日を送つて居りました。朱雀院が五十におなりになつたので、自分達こそ年來の御好意に對して先づお祝ひ申上げなければならないのであるが、關白も御辭退した自分よりもお前がした方がよいと父が申すので、病を押して私は彼方へは伺ひました。いよいよお寂しい靜かな院の御生活のやうに拜見致しましたから、華かな賀宴よりも、此方樣の質素な御計畫は却つて御滿足遊ばす事と存じます。」

「私の所で捧げるのは此通り簡單な事であるから、惡く言ふ人もあらうが、理解のある今のお言葉で、あなたには愈々敬意が拂はれる。大將はかうした經驗は得意でもあるまいが駄目だ。

殊に音樂にお詳しい法皇の前での事だから晴がましいのですよ。大將と一所に、よく子供等にも心得可きことは注意して置いて呉れ給へ。專門家の師匠と云ふものは藝に融通が利かないものだからね。」

さういふ懷し味のある院の御樣子が、衞門督には嬉しくもあり又恥しくも思はれて、少しも早く立去りたかつた。

これだけを見物する夫人達も多かつたから、試樂ではあつたが、當日の赤い白椽に赤紫の下襲ねといふ衣裝を變へて、今日は青い色に臙脂の下襲ねであつた。樂人三十人は皆白裝束であつた。南東の釣殿へ續いた廊を樂所にして、山の南の方から舞人が前庭へ現れる間は仙遊霞といふ樂が奏された。ちらちらと雪が降つて、もう隣へ近づいた春を見せて梅の微笑む枝も見えた。右大臣の四男と左大將の三男、兵部卿の宮の二人の王子、この四人で萬歲樂を舞つたが、皆小い姿で可愛かつた。左大將の典侍腹の二男と、紫夫人の兄弟の源中納言の子の二人が「皇麞」を舞ひ、右大臣の三男が「陵王」を、左大將の長男は「落蹲」を舞つた。「太平樂」「喜春

樂」もあつた。

日が暮れて音樂も舞も面白味が加はつて行く。小さい人達の姿の可愛さに、老いた高官達は皆涙を流して居た。式部卿の宮も御孫の藝の可憐さに鼻の色の變る程に感動して居られた。六條院は、

「年をとるに從つて醉ひ泣きをする事が益々激しくなつて行く。衞門督の可笑し氣に笑つて居るのが恥しい。年月は逆さに進むものではないからね、あなた方も老いは逃れられませんよ。」

と云つて其人の顏を御覽になつた。醉態に托してかうお云ひになるのが戲れらしくはあつたが、衞門督ははつと胸が轟いた。杯が回つて來ても手に取つてほんの一寸酒を頂くだけであつた。見咎められた院は度々御座から酒をおすゝめになるのであつた。苦しみに堪へられなくなつて、衞門督は宴の終らぬ中に辭して歸つたが、惡醉ひから覺める事が出來なかつた。院を目のあたり見て、自責に苦しんだ爲めに逆上したのであらうか、それ程臆病な自分でも無かつたのにと悲しんだ。衞門督は其儘寢ついて、重い容態になつた。父母は心配して自邸へ引取る事

にした。

何事も無かつた間は、女二の宮には其程の深い愛の無かつた良人であつたが、其歎くのを見ると、もう此世の別れであるかも知れぬと豫感される今日の心には、宮を殘して行くのが悲しく堪へられなかつた。生母の更衣も、非常に悲しんだ。今あちらへ移つて、回復するまで別々においでになるのは、宮がお可哀想です、今少し此處に居たら、と云つて、病床との隔てに几帳だけを置いて看護して居た。

「御道理です。私の様な者と結婚なすつた宮の爲めには、せめて相當な地位を得るやうに努力しなければならぬとは知つて居たが、今となつては私の愛が何れ程のものであつたかを宮に解つて頂けないで終るのかと思ふと、死に切れない氣がします。」

などゝ泣き合つて居た。直ぐに移つて行かないので、母の夫人からは催促が來るのであつた。

「一番初めに生れた子なので、母は私が可愛くてならないのです。何んなに心配して呉れて居るかと思ふと、逢ひたがる母の心を滿足させて上げないのも未來の世界の罪になる事でせうか

ら、兎に角病床を彼方へ移します。愈々最期の時と聞いたら必ず彼方へ來て下さい。きつと今一度お會ひしませう。許して下さい。こんな運命で終らうとは思はずに、長い將來には、誠意を汲んで頂ける日が必ずあるものゝやうに思つて安心して居ましたが。」

泣く泣く衞門督は父の邸へ移つて行つた。女二の宮は、思ひ焦れながら殘されて居た。大臣家では祈禱など、あらゆる手段を取つて居たが、病人の衰弱は增して行くばかりであつた。

柏

木

衛門督の病氣は快方に向ふ事もなく、春が來た。父の大臣と其夫人の悲歎を見ては、死を思ふ事は重い罪であると思ふ心は一方にあり乍らも、幼い頃から歪められた自分の厭世的な氣持も、親達の絆に由つて今迄は紛らして來たが、遂に生きて居られぬ程の物思ひを同時に二つも重ねて了ひ、誰を恨みとす可くもない今日、長生をしたい我身かと自ら嘲る氣持ちにもなつた。お憎みになる六條院も、自分が死ねば總てをお許し下さるであらう、その時には長い間かたじけなくして來た以前の御愛情も蘇つて來るかも知れぬとも思つた。少し病が樂になつた樣だと家族の者が病室に居ない時、衛門督は女三の宮への手紙を書いた。

「もう私の命も旦夕に迫つて居ります。御存知の事とも思はれて、何のお訊ねもあなた樣から無いのが、御道理とは存じ乍ら、私としては悲しい事です。」

手が慄へて書き度い事も書けなかつた。

今はとて燃えん煙も結ぼほれ絶えぬ思ひの猶や殘らん

「哀れだと一言おつしやつて頂き度い。暗い闇の世界に入る道の光明にも致しますから。」

と結んだ。今一度逢ひたいと、侍從にも書いた。衛門督とは童女の頃から親しかつたので、困つた事を引起して呉れた人と云ふ恨みはあつたものゝ、流石に侍從は泣き乍ら、

「此の御返事だけはなすつて下さい。これが最後で御座いませうから。」

と宮へ申上げた。

「同情はされるけれども、苦しめられる事に私はもう懲りて居るから。」

宮は書かうともなさらなかつた。六條院の心に折々あの時の過失の影がさして惱む御樣子も見えるのが苦しかつたからであつた。それでも侍從は硯などを持つて來て責めるので澁々お書きになつたので、侍從は、宵闇に紛れて前大臣家の衛門督の所へ行つた。今宵、父の前大臣は大和の葛城山から修驗者を呼んで加持をさせようとして居た。讀經などの聲も騷がしく聞えて來た。衛門督の病氣を卜せて見ても、女の靈が付いて居るのであると云ふので、外へ憑きものを移さうとしても空しかつたので、父君も困つて居るのであつた。今度の僧は大男で恐ろしい目付をして居た。その荒々しく陀羅尼を讀むのを聞く衛門督は、

「あゝ厭になる。罪が深い所爲か、いよいよ死ぬ氣がする。」

と云つて病床を出て、侍從の居る座敷へ來た。病人は寢入つて居ると女房達に云はしてあつたので、大臣はさう信じて、低い聲で山の僧に、病人の始めの容態から、何といふ事なしに重くなつた話をして居た。年はとつても派手に華かな此人が、何卒物怪が現れるやうに骨を折つて頂き度いなどゝ賴んで居るのが哀れであつた。

「ね、侍從、聞いて御覽、何の罪で私がかうなつて居るか知らないものだから、父は、女の靈が付いて居るなどゝ云ふのを信じて居るから。あの方の靈が眞實について居るのなら、厭でならない自分の身も有難くなるだらうがね。昔の人にもあつた罪だと自分で慰めようとはするが、そんな事では私の心は紛れない。六條院は矢張り特別の光の添つた方らしい。あの方と顏を見合した瞬間から、眩しくて、混亂した私の魂は脫け出して了つた。私の魂魄が六條院をさまよつて居るかも知れない。」

衰へた衛門督は泣きも笑もしながら語つた。宮も獨り恥ぢた御樣子で物思ひばかりされて居

ると、侍從から聞くと、冗談に言つたが自分の魂はあちらへ行くかも知れぬといふ氣もした。二人は泣いた。灯を持つて來させて衛門督は宮の手紙を見た。

立ち添ひて消えやしなまし憂き事を思ひ亂るゝ煙くらべに

「私も決して生きては居られません。」

さう書いてあつた。

「此お言葉だけが此世での最嬉しい事になるだらう。果敢いことだね。」

と衛門督は一層泣いた。横になり休み休み返事を書いたが、鳥の足跡のやうな字になつた。

「夕方は特に空をお眺め下さい。煙となつて空をゆく時もそちらを離れられぬ私です。永久に私をお忘れなく。」

病苦に堪へられなくなつて、衛門督は、餘り夜も更けない中に歸つて、私の臨終の近い事を申上げて欲しい、何んな前生の因緣から、こんな道に外れた思ひが心に沁みついた私だらう、と云つて、寢床へゐざつて行つた。侍從は立去る氣がしなかつた。

此日の夕方から女三の宮は異常のある風が見えて惱んで居られた。經驗のある女達はお產と氣が附いて騷ぎ出した。報せを受けて院も來られた。忌はしい疑の混らないかうした事に逢ふのであつたら何んなに珍しく嬉しい事かと、心の中ではお思ひになつた。然し人には氣付かれまいとして、僧なども多く集めて安產の祈禱を餘念も無いやうにさせて居られた。一晩中苦しんで、翌朝日の上る頃お產があつた。男であつた。女と違つて男は顏を人にも見られるものであるから、容貌の似た點などで隱れた祕密も人目には附かないであらうかと、院はお思ひになつた。何んな高貴な方の母になるかも知れぬ女性は素性が確かでなければならないのだから、其點からは男でよかつたかも知れないとも思はれた。忘れる事も無い自分の罪の、これが報いであらうかとも思召した。

高貴な女三の宮を母として生れた末の男子を儲けた院のお喜びは何んなであらうと、家司達は祝ひの設けに騷いで居た。

女三の宮は、か弱い體で恐ろしい大役をお濟ましになつた後、重湯などもお攝りにならなかつた。此序でに死んで了つたらとも思召した。表面は十分うまくお繕ひになり乍ら、院は若君を特に見ようともなさらなかつた。可怪しい、久し振りに出來た若君なのにお抱きにもならず、と云ふ老いた女房達の云ふのを耳にした女三の宮は、これから後の事も思はれ、過去の自身も恨めしくて、尼にならうかといふ心もお起しになつた。夜も此方の御殿に院はお寢みにならず晝間時々お顏を見せるだけであつた。

「佛勤めばかりする樣になつて居るので、產屋の空氣に合はない氣がして、度々は來ないのですが、氣分は何うです。」

と、院は几帳の横から寢て居る宮をお覗きになつた。宮は顏を少しお上げになつた。

「快くなり相も御座いませんから尼にならうと思ひます。其功德で或は生きて居られるかも知れませんから。」

平生に似ず大人びたもの言ひであつた。

「飛んでも無い事です。產をした者が皆死ぬといふものではありませんからね。」

とはお云ひになつたが、院はお心の中では、其希望が自發的に起つたのならばさうさせて了つた方が自分の氣持ちも樂になりはしないかといふ氣がした。以前の愛情が此儘で歸つて來るとも自分ながら思はれない、病氣に托けて尼にさせようかとお考へになつたが、又さうするのは惜しく哀れで、若い盛りの長い髪を切らすのが苦しかつた。院は、

「强く生きようと努めなければ駄目です。」

と云つて、湯をすゝめなどされた。非常に蒼い顏をして力無く寢て居る宮の姿に、賴り無い美しさがあつた。御寺の朱雀院は、宮の御產の後續いて御容態の宜しく無い便りばかりがあるを爲め、佛勤めもお出來になれぬ有樣であつた。お父樣が戀しくてならないのにもうお眼にかゝれないで死んで了ふのでせうか、と宮は泣かれるので、六條院は法皇へお傳へになつた。法皇は、夜になつて俄かに六條院へ御幸遊ばされた。法皇は、

「もう此世の事は一切願まいと決心して居ましたが、若し逆事があつたら、逢ひたがる子に逢つて置かないのも、あの世の道の妨げになる樣な氣がするので。」

と、驚いて迎へた六條院に仰せになつた。其たゞ墨染の衣を着てお出でになつた淸いお姿に、院は羨しいやうな氣もした。六條院は、

「大した病氣では無いのですが、何分今迄の衰弱が甚しい所へ食欲もおありになりませんので。」

と申上げて、宮の寢て居られる帳臺の前へ法皇を御案內した。女房達はいろいろ御介抱をしながら宮を床の下へお下し申上げた。法皇は、間の几帳を横へ寄せて、

「加持の僧のやうだが、未だそれ程の修業は出來て居ない。」

と眼をお拭きになつた。宮も弱々しく泣かれた。

「私はもう助かるとは思はれません。お出で下さいました此機會に私を尼に遊して下さいましし。」

「その志は結構な事だが、未だ若いのだから後で迷ひが起つて世間の人に嘲れるやうな事も無いとは限るまい。よく考へてからの事にしたら。」

それから法皇は六條院に、

「かう進んで云ふのですが、既に危篤な場合であれば暫くでも其志を實現させて、佛の御助けを得させ度いと思ひます。」

と仰せられた。

「此間から頻りにさうは申すのですが、病氣が人の心をたぶらかして、そんな事を奬めるのかと存じて私も同意致さないのです。」

「物怪のせる業でも、それは惡い事でも無いし、この儘で死なして後で悔いるやうな事があつてもよく無いと思ふ。」

法皇の御心の中では、六條院の愛の深くないのが常に不安で、さうかと云つて自分から不足がましく言はれもしなかつた。これを機會に決斷して尼にさせて了つた方がよくは無いか、他の夫人との競爭に宮が敗れた結果とは世間も見まい、曾て宮に讓つたものゝ中には廣い邸もあるのであるから其處に宮を住ませよう、生きて居る中に自分が處置を決めて、濟まして置いた

方がよからう、さうなれば妻の間は冷かな六條院も出來る丈けの親切は盡して呉れよう、其態度も自分は見きはめて置く必要があると思召すのであつた。自分が來た序でに受戒させようと法皇は仰せになつた。宮の過失の事も忘れて、六條院は悲しみに堪へられず、几帳の中へ入られて、

「何故そんなお氣持ちになるのです。暫く氣を鎭めて、食物などをお攝りになる樣に努めたら如何です。體が弱くては佛勤めも出來ないではありませんか。兎に角病氣の回復を計つた上での事になすつたら。」

と言はれるのであつたが、宮は頭をお振りになるばかりであつた。自分を恨めしくお思ひになつた事もあるのでは無いかと院は愍然でならなかつた。夜明けに近くなつた。明るくならない中にお歸りになり度い法皇は、祈禱のために侍して居た僧の中の有德の者を選んで產屋に呼び寄せて、宮の髮を切ることをお命じになつた。宮が若い盛りの美しい髮を切つて、佛の戒めをお受けになるのは悲しい光景であつた。

六條院は思ひ切れずに聲を上げて泣いた。法皇も、特に可愛く思召して居た宮の果敢い姿に

萎れて居られたが、未だ暗い中にお歸りになつた。宮は父君をお見送りも出來なかつた。

後夜の加持に、宮に憑いて居た物怪が人に移つて、

「何うだ、こんな事になつて了つたではないか。上手に一人を取返したと思つておいでになる様子が口惜しかつたから、それからは氣の付かない樣にして此方へ私は來て居たのだ。もう歸りますよ。」

と笑つた。紫夫人を惱した物怪がそれ以來此方にも憑いて居たのか、あの不祥事も彼れが爲さしめた業かも知れぬとお氣の付いた六條院は、宮がお可哀想でならなかつた。宮の健康さへ取戻す事が出來たらと、油斷なく修法などもお續けになつた。

六條院の出產から御出家と續く出來事を病床に聞いた衞門督の容態は一層重くなつた。女二の宮がお可哀相でならなかつたが、父母が始終附いて居る病室では、お呼びする事も自然お妻を皆に見られて了ふ隙も出來ようし、それが出來なかつた。無理をしても一條の宮へ今一度行つて見たいと言つたが、兩親は許さなかつた。自分の死後の女二の宮の世話を母の夫人にも賴

んだが、あなたの死後何れだけ生きて居られる私だと思ふのですかと、母も先づ泣くのであつた。衞門督は、直ぐ下の弟の左大辨に詳しく宮に對する遺言をして置いた。弟達も皆慕つて、殊に末のなどは親のやうに思つて居たのであるから、心細がらぬ者は無かつた。使用人なども皆悲しんで居た。朝廷でも俄かに權大納言に陞された。感激して元氣づいて今一度參內する事もあらうかとの御計ひであつたが空しかつた。左大將は始終見舞を書き送つて居たが、陞任の祝ひを述べに大臣家を訪ねた。衞門督の住む對の方の門內は馬や車に滿されて居て、人々の出入りも忙しかつた。衞門督は、失禮ではあるが病室へと、左大將を案內させた。少年時代から隔てなく親んで來た左大將には、近く逼つた死別が、親兄弟にも劣らず悲しかつた。陞任の喜びに今日だけは氣分もよからうかと想像して來た其期待も外れて了つた。几帳の端を上げて中を見ると、

「全然私のやうでなくなつて了ひましたよ。」

と衞門督は烏帽子を胸の下へ入れて少し起上らうとしたのが苦し相であつた。柔い白い衣服

を幾枚も重ねた、痩せ細つた姿は品が増して見えた。

「長くお惡かつた事から言へば、特別酷く病人らしいお顏になつたとも思はれない。平生よりも美男に見えますよ。」

左大將はさう云つて涙を拭いた。

「何うしたのです。かうして惡くなつて行つたのだと話して呉れる者も無いので、親しい私でさへ何の御病氣か知らないので。」

「自分でも何時重くなつたのか解らずにかうなつて了つたのです。惜くも無い私の生命の爲めに祈禱などもされるので、苦痛で、早く死の時が來たらとも思ひます。私とすれば此世を去つて了ふのかと思ふと種々の心殘りも多いのです。親への孝行も中途になつて了ひました。然しさうした事よりも大事な煩悶が私にはあるのです。身内の者にも云へないのですがあなたにだけ聞いて置いて頂きませう。私は六條院樣の感情を害して居るらしい事がありましてね、それを苦に思つて居る中に病氣のやうになつて了つたのですが、あの賀宴の試樂の日にお招きを受

けて參つた時お目にかゝつて、尙許して頂けない御表情を私は見ると、もう世の中が味氣なくなつて病みついて了ひました。小い時からの深い御信賴に對してもあの方には眞心からお盡し致さうと思つて居た私ですが、中傷した者でもあつたのかしらと思ひました。死んで殘る此問題への關心は無論後世の往生の妨げにならうと思つて居ますが、あなたは此話を覺えて居て下すつて何かの機會に六條院樣へお取なし下さいませんか。死んだ後でも許して頂けたら、私はあの世からあなたに感謝します。」

衞門督は病苦に堪へられない風であつた。左大將には、さう云はれゝば思ひ當る事も無いではなかつたが、あれ程の大きな事實とはもとより知らなかつた。

「それはあなたの誤解でせう。あなたの病氣の重くなつたのを院は心配して居る程ですから。何故今少し早く私に云つて下さらなかつたのです。私が解決をして上げたものを。もう今になつては仕方が無い。」

と左大將は殘念がつた。

「自分でもこんなに早く終る命とも思はなかつたからです。此事は絶對に誰にも漏らさないで下さい。一條にいらつしやる宮にも何かの時には好意を持つて上げて頂き度い。」

我慢のならぬ程苦しくなつた衛門督は、もうお歸り下さる樣に、と手を振つて見せた。加持の僧や父母が來た。左大將は泣く泣く其處を出た。同腹の女御はもとより、妹の左大將夫人雲井の雁の歎きも非常なものであつた。兄弟の中で最も親しんで來た玉鬘は自分の手で祈禱もさせて居た。終に女二の宮にも逢はずに、泡の消えるやうに衛門督は死んだ。愛情の點は別として、形式的には飽くまでも尊敬して盡す可きは盡した優しい良人であつたので、宮も恨めしい思ひなどは抱いておいでにならなかつた。短命で終る人であつたので何事にも冷い寂しい所があつたのかとも悲しく追懐されるのであつた。兩親の歎きも大變であつた。自分達が先に死ぬのをと泣くばかりであつた。尼宮も、死んだとお聞きになるのは悲しくお思召した。

三月になり、空も麗かな日が續いて、六條院の若君の五十日の祝ひの日が來た。色の白い美しい若君は聲を出して笑つたりした。院がおいでになつて、

「もうさつぱりした氣分になりましたか。御回復の甲斐もありませんね。かうした姿でなくて快くおなりになつたあなたを見る事が出來たら何んなに嬉しいか。」

と涙ぐんで恨みを云はれた。此方の御殿へお出でにならない日もなかつた。南向きの座敷に若君の小さな席が設けられて祝膳が供された。眞相を知らぬ人々からの祝ひの品も夥しかつた。

尼宮も起きておいでになつた。切揃へられた髪の先が一杯に擴がるのを苦にして額なども後へ撫付けておいでになる時、院が几帳を横へ寄せて其處に坐られた。恥しさに宮はうしろへお向きになつた。授戒の日に院が惜しがつて長く殘して切つた髪なので、一寸見た所は普通の通りであつた。重ねた鈍色のお召物の下に黄味を含んだうす色を着た、未だ尼になり切らないお姿は、子供らしく艶に見えた。

「墨染といふ色は何うしても悲しい色で目も眩む氣がする。かうしてあなたに捨てられたのも私自身の罪であるとも考へられるのが苦痛です。取返せないものでせうか。」

と院は歎息した。

「眞實の尼の氣持ちになつてお了ひになれば、それは病氣の爲めでなく私が厭におなりになつたからのやうな氣がして情けない。矢張り私を愛して下さい。」

「尼といふものは物の哀れは分らないものだ相です。まして私など何う御返事したらよいか。」

「仕方の無い方ですね。お分りになる事もあるでせうが。」

と云ひさした院は言葉を切つて、若君を見ようと遊ばした。乳母には良い家の出の人ばかりが選ばれて居た。其人達に色々注意をして院は若君を抱いた。若君は笑みを見せた。左大將の此の位の時を思ひくらべても少しも似て居ない。女御の宮方は皆父帝に似て王者らしい氣高さはあつても、殊更に美しくは無かつたが、此若君は貴族らしい品に愛嬌も添つて居て眼つきが美しかつた。思ひなしか亡くなつた衛門督に似て居た。宮は衛門督の子とは確にも思つて居られなかつた。たゞ院一人がお心の中で、哀れな關係であると故人の事を考へておいでになつた。人生の無常が次々と思はれて零れる涙を、今日は祝ひの日ではないかと、院はお隱しになつた。

せめて忘れがたみでもあつたらと歎く衛門督の父母の大臣夫婦に此れを見せてやる事も出來

ず、あの思ひ上つた男も自身の心から命を縮めて逝つたかと思ふと哀れになつて、其罪を憎んで居た感情も消えて、お泣きになつて了つた。女房達が何時の間にかお居間を出て行つて居ないので、院は宮の傍へお寄りになつた。

「此小さい人を何う思ふのです。こんな可愛い人を置いて此世がよく捨てられましたね。」

宮は顏を赤くした。

誰が世にか種は蒔しと人問はば如何が岩根の松は答へん

「可哀想ですよ。」

と院が囁くと、宮は御返事も無くひれ伏して了つた。何んな氣持でおいでかしら、平氣では居られぬ筈だがとも思はれて、院のお心は苦しかつた。

衛門督が思ひ餘つて自分に洩した事は何んな譯のある事かと、左大將は思つて居た。故人があれ程に弱つて居ない時であつたら今少し核心に觸れた事も訊けたらうがとも思はれて、其人が戀しかつた。女三の宮が出家されたのも何か理由があらう、二條院の紫夫人があの重態の時

に泣いて願つても許さなかつた院では無いかと、左大將は思つた。昔から女三の宮には關心を持つて居て、思ひ餘つた樣子なども自分などに見せた事のある衞門督である、表面は飽くまでも冷靜で何を思つて居るのか窺ひも出來なかつたが、情には弱い所があつたから、許されない戀に狂奔して最後に身を誤るやうな事になつたのかも知れない、女にも氣の毒な事である、前生の因緣とは云つても矢張り輕率な事であつた、と左大將は一人思ふのであつた。夫人にも話さず、院にも故人の意志を告げ兼ねて居た。

故人の父母の涙の乾く時は無かつた。供養の佛事なども二男の左大辨が主にやつて居た。七日七日を注意されても、父の大臣は、

「もう一切何も自分には聞かせないで呉れ。聞けば悲しみが湧くばかりで、却つて彼れの行く道を妨げる事になる。」

と云ふだけであつた。一條の宮の廣いお邸は寂しくなるばかりであつた。愛して居た野狩りの鷹や馬などを預つて居た人達が力を落し乍らも寂しい姿で出入りするのも、女二の宮には悲

しみの種であつた。庭の木立の枝が煙つて、咲き初めた梅もお寂しかつた。女房達も皆喪服姿になつて居た。

或日の晝頃、前驅の聲が高くして、門の前で留つた車があつた。うつかりして居ると亡くなつた殿樣がお出でになつたのかとも思はれると云つて泣く女房もあつた。左大將が訪ねて來たのであつた。中央の間に續いた緣の付いた南向きの座敷に、清楚な風采の客人は迎へられた。宮の母君の御息所が應對に出た。左大將は、臨終の折の故人の言葉もあり、出來るだけ宮のお世話はするつもりである、早く伺ふつもりであつたが御所の用も忙しかつたのでなどと云つた。

「大臣の愁歎を拜見しても、宮のお悲しみが思はれます。」

と大將は度々涙を拭いた。御息所も鼻聲になつて、

「宮樣も未だお若いので、悲しみに沈んで、あの世へ後を追はれるのでは無いかと案じられてなりません。私が今まで生きて居りまして、殿樣をお亡くししたり、宮樣の未亡人になるのを見て居なければならないのが苦しう御座います。お聞き及びでも御座いませうが、私は始めか

ら此御縁談には賛成致しませんでした。何故今少し院をお諫めしなかつたかと思ふ事も御座いましたが、かうならうとまでは想像致さなかつたのです。宮様はよくよくの御因縁でも無ければ結婚遊ばさずに神聖なものとしてお置きし度いと、古風な願ひも致して居りましたが、かういふ何ちらつかずの不幸なお身の上になつた以上、いつそ悲しみでお亡くなりになつた方がいいとも思ふのですが、さてさうも諦め切れるものでも御座いませんので。」

と云つた。大將も泣き乍ら、

「短命で亡くなる所爲か、此二三年非常に滅入つて見える時が多かつたのです。悟り切つた清澄な心境といふものかも知れないが、不安に思はれて、忠告らしい事を申しますと、あの人は憐れむ風に私を見るのでした。宮のお悲しみになる御様子を伺ひますと勿體ない事ですがお傷はしく存じます。」

と云つて、暫くして辭した。故人よりも五つ六つ若い、美しく雄々しい左大將の歸つて行く姿を、女房達は悲しみも少し紛れて見送つて居た。左大將は前の庭の櫻を眺めて、

時しあれば變らぬ色に匂ひけり片枝折れにし宿の櫻も

と、わざとで無い樣に口誦んだ。

此春は柳の芽にぞ玉は貫く咲き散る花の行方知らねば

と返歌をした御息所は、朱雀院でも才女の聞えが高かつた筈だとも、左大將は思つた。

それから左大將は前太政大臣の邸を訪ねた。子息達が幾人も來て居て、案内される儘に、離れの居間に行つて舅に會つた。何時までも綺麗な大臣の顏は酷く痩せて、髭も剃らないので延びて居た。親を失つた時に比べて子を失つた後の大臣の衰へ方はひどい樣だと世間で云ふ通りになつて居た。左大將は一條の宮を御訪問して來た話などをして、懐紙に控えて來た御息所の歌をも見せようとした。

「眼もよく見えないが。」

と大臣は涙の眼をしばたゝいた。平凡な歌であつたが「玉ぬく」といふのが大臣自身にも痛切に感じられて居た事なので、涙が頻りに零れた。

「あなたのお母様が亡くなられた時、私はこれ程悲しい事があらうかと思つたが、女の人は世間との交渉も少い爲め、今度のやうに事に觸れて不意に苦しみが後で感じられる事も無かつたのです。彼れも朝廷の御引立を受けて地位も得て行つたのですが、彼れの庇護を受けようとする者も多くなつて居たのですから、彼れの死に失望した者も隨分あるでせう。」

大臣は空を見上げて歎息した。夕方の雲が鈍色に霞んで、花の散つた後の梢にも此時始めて大臣は氣がついたのであつた。そして大將の懷紙に歌を書いた。

木の下の雫に濡れて逆さまに霞の衣着たる春かな

左大將は一條の宮へも始終見舞を云ひ送つて居た。四月の初夏の空の下にあらゆる木立が一色の綠を作つて居るのも寂しく思つて居る人の家では、總てが心細く、宮の御母子が退屈を覺える時、又左大將が來訪した。庭の敷砂の間々には强い蓬が擴りかゝつて居た。植込みの灌木なども枝が延びるに任せてあつて蟲の秋を思はせる薄なども哀れであつた。喪の家であるから御簾に代へた伊豫簾に、傍の鈍色の几帳が透いて見えるのは眼に涼しかつた。童女などの濃い

鈍色の汗衫の端などが少し見えたりした。左大將は緣に座つて居た。此頃體のよくない御息所は寢て居たので、何かと女房が出て應對して居た。柏の木と楓が若々しい色をして枝をさし交して立つて居るのを左大將は指して、

「何んな因緣のある木同志なのか、賴もし相ですね。」

と女房に言つた。そして簾の方へ寄つて、

ことならばならしの枝にならさなん葉守の神の許し有りきと

「隔てをお除き下さらぬのが遺憾です。」

と、一段高くなつた室の長押へ凭りかゝつて居た。宮は少將といふ女房に御返事を云はせた。突然さうした恨みをお云ひ遊ばすと御好意が無になります、といふのであつた。それも眞理である事と、左大將は微笑した。其時御息所がゐざつて出て來る氣配がしたので、少し居住ゐを直した。

「餘り悲しく思ひ過ごします所爲か、體の具合も惡く呆けて了ひましたが、かうして度々御親

切にお訪れ下さるのに力づけられて出て参りました。」

といふ御息所は如何にも病氣らしかつた。

「お悲しみも御道理至極の事ですが、皆前生からの決つた因緣なのですから。」

などと左大將は慰めた。お氣の毒な宮に對する同情の念が、何時か戀しく思ふ心に變つて行くのが自身にも分つた。美しい方では無くとも、結婚の後は、外に心を移すやうな自分では無いとも思つた。

「もうお心安くなつたのですから、衞門督と思召して、私には御遠慮なく御相談下さい。」

と、露骨に戀を現はさずに、持つて欲しい好意を懇ろに要求する左大將であつた。

「六條院様とは又異つて、男らしい華かな第一印象が誰よりも勝れた方ですね。」

などと女房達は左大將の噂をした。

音樂の御遊びの折などには、帝も衞門督を御追憶になるのであつた。「あゝ衞門督が」といふ言葉が何につけても人々の口から出た。六條院はまして故人を憐れむお心が日に日に增して行

つた。六條院お一人が知つて居られる故人の形見の若君は、秋になると這ひ出すやうになつた。

横

笛

六條院には、故人の衞門督の偲ばれる事が多かつた。七七日の法事にも御厚志の見える讀經の寄付があつた。何も知らない幼い人の顏を見ては又堪へられぬお悲しみに、黃金百兩をお贈りになつた。左大將も種々厚い志を見せて供物などをした。未亡人の一條の宮へも物を多く送る事も忘れなかつた。兄弟以上のその親切を大臣と夫人とは嬉しく思つて居た。

朱雀院の法皇は、女二の宮も亦不幸な境遇になられて了ひ、入道の宮も今日では人間としての幸福を餘所に遊ばすお身の上であるのを、父君として殘念ではあつたが、此世の事は一切問題にしまいと强ひて忍んで御いでになつた。佛勤めの折には、女三の宮も此修業をして居られる事をお考へになつた。法皇は御寺に近い林から拔いた竹の子に山から掘つた自然薯を添へて宮にお送りになつた。其手紙には、同じ佛に救はれる爲めには猶努めなければならない事が多いとも書かれてあつた。涙ぐんで宮が讀んでおいでになる時、六條院が來られた。院は、平常と違つた漆器の廣蓋などが置かれてあるのを不審に思召したが、それは法皇からお寄越しになつたものであつた。お手紙の文を、院も身に沁みて御覽になつた。御寄托を受けながら不誠實

な者になつて了つた御自身を思ふと、殊に法皇が傷ましかつた。御使の者には鈍色の綾の一襲ねをお贈りになつた。宮が書きつぶされた紙が几帳の傍にあつたので手に取つて院が御覽になると、力の無い字で、

憂き世には有らぬところのゆかしくて背く山路に思ひこそすれ

とあつた。

乳母の方で寢て居た若君は、眼を覺まして這つて來て院のお袖にまつはつた。白の上に支那の小模樣のある紅梅色の着物を長く引きづる姿が可憐であつた。すんなりと柳の木を削つて作つた感じであつた。頭が露草の汁で染めた樣に靑かつた。口許が美しく、上品な眉の仄かに長い所などは衞門督によく似て居たが、彼れは此程に美しくは無かつた、既に氣高さの備つた所など鏡に映る自分の子らしくも見られるとも思はれた。二足三足踏み出せる程になつて居て、若君は廣蓋の方へ近づいて、竹の子を口に當てゝ見て投出したりした。

「不可いね。今から食物に目をつけると云つて口の惡い女房は嘲ふだらう。」

と笑ひ乍ら、院は御自身の膝の上へ若君を抱いた。

「此子の眉は素晴しいね。此位の時はたゞあどけないばかりだと思つて居たが、此の子は既に美しい貴公子の相がある。危險だよ、內親王もいらつしやる家の中でこんな人が大きくなつたら。どちらにも心の苦勞をさせなければならない日が必ず來るだらう。然し私にはそれは見られまいが。」

「まあ、緣起の宜しくない事を。」

と女房達は云つた。齒が生えかゝつて居る若君は、齒莖のむづ痒さに、無暗に竹の子を嚙んで見るので、よだれが流れた。

「變つた風流男だね。」

と院はお笑ひになつた。若君はそゝくさと院のお膝を下りて外へ這つて行つた。日に日に可愛くなつて行く若君を見ると、過去の不祥事などは忘れてお了ひになるやうであつた。愛す可き子を自分が得る因緣の過程として、あの意外な事も起つたのであらうともお思ひになつた。

自分の宿命といふものも必ずしも完全なものでは無かつた、最も尊貴な配偶たる可き人は既に尼になつて了はれた、かう思ふと女三の宮が恨めしくもなつた。

衞門督が臨終の前に殘した一言を思ふと、左大將は、何の事であらう、院に申上げて其時の御表情などで御心を讀まうかとも思つて居た。不快にお取りにならぬよい機會に院のお耳に入れ度いと願つて居た。

秋の夕方、大將は寂しい一條の宮をお訪ねした。宮は今まで琴などを彈いて居られたらしかつた。いつもの南の座敷へ來て見ると、此緣に居られた人が靜かにゐざつて入つた氣配が何となくして、衣ずれの音と衣の香が散つて、艶な氣持ちがした。御息所が出て來て故人の話などをして居たが、人の出入も多く子供も騷がしい家に馴れて居る左大將には、此邸の靜かさが身に沁みるやうに思つた。植込みの花などは蟲の音に滿たされて野のやうに亂れた夕明りの下の庭を左大將は眺めて居た。出た儘になつて居る和琴を引寄せて見ると、律の調子に合はされてあつて、よく彈き馴らされたなつかしいものであつた。こんな趣きの女住居へ放縱な癖のある

男が來たら自制も出來なくなる事も起らうと心に思ひ乍ら、左大將は和琴を彈いて見た。或曲の一節を彈いた後で、左大將は云つた。

「あの人は此名手でした。あの藝術の妙味は宮樣へお傳はりして居るでせう。お聞きし度く思ひます。」

「いゝえ、あれ以來はぼんやりとしてお彈きになり、毎日なさいますのはお物思ひだけで御座います。音樂も結局寂しさを助けるものではないのかといふ氣も致します。」

「御道理です。」

左大將は琴を前へ押しやつた。

「樂器其ものに故人の音がついて居るか何うか、私共に分ります程にお彈きになつて見て下さいまし。みじめな私共の耳を慰めて頂けたら。」

と御息所は云つた。

「私こそ宮樣のを承り度い。」

御簾の傍に和琴を寄せて、大將はかう云つたが、直ぐに氣輕に御承知になる事でも無いのを知つて居るので、强ひてお望みもしなかつた。月が上つて來た。空を幾つかの雁が飛んで行くのにも、孤獨でないものとして宮にはお羨しからうと思はれた。冷やかに身に沁む風に誘はれて宮は仄かに十三絃をお搔きならしになつた。より多くを望む心になつた左大將は、琵琶を借りて「想夫戀」を彈き出した。

「自信あり氣でお恥しいのですが、此曲だけは御一所に遊ばして下すつてよい理由のあるものですから。」

他のものより多く羞恥の感じられるこの曲に宮は手を出さうとなさらなかつた。たゞ琵琶の音が深く心に沁みるやうであつた。宮は漸くその曲の末の方だけを合せてお彈きになつた。少しだけでお止めになつた爪音が、左大將は怨めしくも思はれた。

「秋の夜を何時までもお邪魔致して居ては故人から咎められる氣も致しますので、もうお暇いたしませう。又何日かお伺ひ致します。此樂器の調子は此儘にして、お待ち下さいませんか。」

戀を匂はして、左大將は云つた。御息所は、

「今夜の御風流を批難致す者もございますまい。昔話をお補ひになる程にしかお聞かせ下さいませんのが殘り惜しく思はれます。」

と云つて、横笛を贈物に添へた。

「これは古くから傳はつた物のやうに大納言は申して居りました。こんな女住居に置きましては笛にも氣の毒で御座いますから。」

私などが頂いては、と云ひ乍ら左大將は手に取つて見た。これは始終衛門督が使つて居て、これを生かせる樣には自分も吹けない、自分の愛人に讓つてやらう、などゝ言ふのを聞いて居た左大將には、又別の感慨があつた。そして試みに吹いて見た。盤渉調を少し吹いて立たうとすると、御息所は、

露繁き葎の宿に古への秋に變らぬ蟲の聲かな

と云ひかけた。

横笛の調べはことに變らぬを空しくなりし昔こそ盡きせぬ

と左大將は答へて、尙去り難い此邸を出て行つた。既に深更であつた。三條の自邸へ歸つて見ると、もう格子なども下して誰も寢て了つて居た。一條の宮に戀をして親切な訪問を常にするといふ事を夫人へ言ふ者があつたので、良人の車が門の內へ入つて來たのも知り乍ら雲井の雁の君は寢入つた風をして居るらしい。

「何うしてこんなに早く戶を閉めて了つたのだらう。この好い月を見ようともしないで。」

と歎息して、左大將は格子を上げさせ、御簾を上げなどして緣近く出て横になつた。

「こんな晩に眠つて了ふ人がありますか。少し出ていらつしやい。」

夫人は何とも答へなかつた。夢に怯えて何か云ふ若君達の聲があちこちにして、女房も其處らの部屋に大勢寢て居る此邸と、一條の邸の靜寂とを、左大將は思ひ比べて居た。自分が歸つた後、女二の宮御母子は何んなに寂しく月夜の庭を眺めて居るだらう、樂器などもあの儘で二人の女性が弄んで居はしないか、御息所も和琴の名手と聞いて居るからとも思つた。何故あれ

程立派な女二の宮を、衛門督は眞實に愛しては居なかつたらう、少年と少女の時の戀が今日まで迄續いて來た年月を數へて見ると自分の妻の驕慢にも無理が無い、と思ひもした。少し寢入つたかと思ふと、衛門督が病室で見た時の袿姿で傍に居て、横笛を手に取つて居た。夢の中でも、故人が笛に心を引かれて來たのに違ひないと思つて居ると、衛門督は、

「これはあなたに上げようと思つて居たのでは無い。外に考へがあつたのです。」

と云つた。よく問いて置かうとする時、若君の泣出した聲に、左大將の眼が覺めた。若君は長く泣き止まず乳を吐いたりしたので、乳母なども起き、雲井の雁の君も、灯を近くへ持つて來させて、顏にかゝる髪の毛を耳に挾んで若君を抱いた。色の白い美しい若君に乳首を含ませて居たが、出さうも無い乳房であつた。左大將は、何うだ、などゝ云つて傍へ行つた。夜の魔を追拂ふ爲めに米を撒いたりする騒ぎに、夢の悲しみも紛れて居た。

「此の子は何處か苦しい樣ですわ。華かな方に夢中になつて、遲く月を眺めたりなすつて格子を上げてお置きになるので物怪が入つて來たのでせう。」

雲井の雁の君が若々しい顏付きをして恨むのに、左大將は笑つた。

「成程、私が格子を上げなかつたら、物怪の入る路も無いからね。大勢のお母樣になつたのであなたも大した考へ方が出來るやうになりましたね。」

「彼方へいらつしやい。人が見ます。」

明るい灯に、美しい左大將の眼から逃れるやうにそむける妻の顏を見て、可憐な人だと思つた。若君は夜通し泣き止まなかつた。

左大將は夢を思出すと、贈られた横笛が持餘される氣がした。笛を吹く事の無い女の一條の宮の所へ置きたがる理由も無い、こんな事に魂が執して居ては成佛も出來なからうと思つた。愛宕の寺で誦經をさせ、故人の好きであつた寺でも供養をさせもした。横笛を寺に寄進するのも、折角自分に贈つて呉れた一條の人達に濟まない事であつた。左大將は六條院へ行つた。院は丁度姫君の女御の御殿へ行つて居られた。三つ位になる第三の皇子は、矢張り紫の女王がお育てして居たが、左大將を見て走つて來て、

「大將樣、私を抱いて彼方の御殿へ伴れて行つて下さい。」

とお言ひになつた。

「いらつしやいまし。たゞ女王樣の御簾の前を何うしてお通り致しませう。」

左大將は宮を膝の上へお抱きした。

「誰も見るものか。私は顏を隱して行くから。」

宮が袖を顏へお被りになるのが可愛かつた。左大將は其儘寢殿の方へお抱きして行つた。此方の御殿では二の宮が女三の宮の若君と一緒に遊んでおいでになる其可愛い姿を院は眺めて居られた。角のお座敷の前で三の宮をお下ししたのを二の宮がお見付けになつて、

「私も大將樣に抱いて頂くの。」

とお云ひになると、三の宮もきかなかつた。

「駄目。私の大將樣だもの。」

「陛下のお附きの大將を御自分のものにしようとお爭ひになつたりしてはなりませんよ。三の

宮は何時でもお兄樣に反抗をなさる。」

と院が仰せになつた。左大將も、

「二の宮樣は隨分お兄樣らしく、直ぐお讓りになりますね。お小さくても中々お偉い。」

と云つた。院は微笑を顏にたゝへて、お二人とも可愛くてならないやうな御樣子であつた。

「こんな所では大將に失禮だ。彼方で話さう。」

と立たうとされても若宮達がお離れにならない。宮の若君は宮達と同じに扱ふ可きで無いとは思召し乍らも、院は女三の宮のお僻みになるのを憚つて、同じ樣に大事に遊ばして居た。此若君を未だ左大將はよく見た事も無かつたから見度いと思つて、御簾の間から顏を出した時に萎れた花の枝の落ちて居たのを手に取つて見せ乍ら招くと、若君は走つて來た。うす藍色の直衣を着た色の白い光るやうな美しい顏が、皇子達にも勝つて居た。疑つて居る左大將の思ひなしか、眼つきなども切れ長の目尻のあたりは衞門督によく似て居た。院の眼にも此れは必ず分つて居るだらう、院は何うお考へかしらんとも左大將は思つた。

皇子達は思ひなしか氣高く見える所はおありになるだけであるが、此若君は品位の外に圖拔けた秀麗さがあつた。若し自分の疑ひが事實であつたら、衛門督の父の大臣が、故人の子供だと名乘つて來る者も無い、せめて其位の形見は殘して行つて呉れゝばよかつたのにと歎いて居たが、これを知らせないのも罪作りな事である、と左大將は考へ、又そんな事はありやうが無いとも思ふのであつた。優しい性質の若君は左大將にも馴染んで了つて傍を離れずに遊んで居るのも可愛かつた。

院が對の方へ行かれたので、左大將もそちらへ行つて話す中に日も暮れて行つた。昨夜お訪ねした一條の宮の御樣子などを左大將が申上げるのを、院は微笑し乍ら聞いて居られた。

「想夫戀を少しお合はせになつた事などは、文學的ではあるがね。自分の經驗から言ふと、女性は結果を考慮して異性を惹き付けるやうな事は何處までも避けるやうにしなければならないと思ふ。故人への友情から親切にして上げるのは好いが、何處までも清い交際をしなければ不可けない。双方の爲めにね。」

さう云ふ院のお言葉に、左大將は、他人にはさうは云ふものゝ、若し御自身であつたら此場合冷靜に處して行かれるであらうか、と思つた。

「過ちなどの起りやうがありません。唯同情を致して居るだけです。想夫戀も、たゞ少し許り合して下すつただけですから、非常に趣きがありました。大變女らしい優しい性質の方らしいやうです。」

かう言つた。左大將は豫て願つてゐた機會が來た樣に思つて、少し院の方へ寄り乍ら、昨夜の夢の話を申上げた。物も言はずに聞いて居られた院のお心の中には思ひ合す事もおありになつた。

「其笛は私の所へ置いておく因緣があるのだ。昔は陽成院の御物でね。私の伯父の亡くなつた式部卿の宮が祕藏して居られたが、大納言は子供の時から笛が巧くて、宮のお邸の萩の宴の時に、贈物としてお與へになつたものなのだ。」

と、院は仰せになつた。故人の衞門督が遺り度いと思ふのに紛れも無い人は、自分の子とし

て此家で大きくなつて行くのだともお思ひになつた。左大將はもう何事も想像して居るのでは無いかとお思ひにもなつた。總てをお察しになつた院のお顏色を見ると、左大將は一層言ひ難かつたが、ふと心に浮んだやうにして、あの臨終の折の話をした。

「只御感情を害して居るからといふだけなのですが、何んな事だつたのでせう。」

あの祕密の全貌を左大將は知つて居るとお感じになつた院は、詳しく話す可き事でも無いので、暫くは、突然をかしな話を聞くものだといふ御表情を見せてゐた後で、

「そんな死んで行く時にまで氣に懸けるやうな事を、何時自分が言つたりしたりしたらう。思ひ出せないね。何れ折を見て、君の夢に關する細い說明もして上げよう。」

と言はれただけであつた。自分の云ひ出したのにあきたらず思召すのかと、左大將は思ひもした。

鈴蟲

夏の蓮の花の盛りに、出來上つた女三の宮の持佛の供養があつた。御念誦堂の一切の裝飾品などは六條院のお志で寄進されてあつたのを、此時初めて飾付けになつた。柱にかける幡なども紫夫人が支那錦を選んで作つた。花机の覆ひは鹿の子染めであつた。帳臺の四面の帳を皆上げて、後の方に法華經の曼陀羅を掛け、支那の百歩香が焚かれた。阿彌陀佛と脇士の菩薩は白檀に彫られたもので、閼伽の具は小さく、白玉と青玉の蓮の花の形にした幾つかの小香爐には荷葉香が燻べられた。黄泉の六道を行く亡者の爲めに、宮は法華經を六部お書かせになつた。宮の御持經は六條院が手づからお書きになつた。これを二人の結緣にして永久に導き合ひたい希望が御願文に述べられてあつた。

堂の準備が出來て、講師の僧も座に就きなどした時、六條院も其處にお出でにならうとして先づ宮の居られる西の廂の座敷に入つて御覽になつた。狹い假りの御居間には、暑苦しく著飾つた女房などが五六十人も集つて、澤山の火入れに薫香を煙い程焚いてゐふぎ散らして居る、其傍へ院はお寄りになつて、

「空だきといふものは、何處で焚かれて居るか解らない方がいゝのだ。富士の山頂よりもつと酷く煙の立つのは何うかと思ふ。說敎の間は靜かにして、無遠慮に衣ずれの音なども立てない樣に。」

などゝ言はれた。北側の座敷とのしきりも今日は御簾にしてあつた。御簾越しに、佛の御座になつて居る帳臺の眺められるのも悲しかつた。こんな儀式をあなたの爲めにさせる日があらうとは夢にも思つて居ませんでしたと院はお泣きになつた。

此世における勝れた榮華を捨てゝ、永久の緣を佛に結ばれる宮を、講師の僧は讃美して述べた。宮中からも御寺の朱雀院からもお使が遣はされた。

朱雀院は、御分配になつた三條の邸へ女三の宮はもうお歸りになつた方が世間體もよからうと仰せになるのであつたが、六條院は、

「遠くなつては始終お眼にかゝる譯にも行かず困ります。私の期待して居た事が皆畫餅になつて了ひます。せめて自分の生きて居る間だけでも此儘にして居て貰ひ度い。」

とお言ひになるのであつた。三條の邸も修繕はさせてお置きになつた。莊園からの上りなども其倉に納めさせておいでになつた。新たに倉が建てられて六條院から貴重品等も移された。秋になつて、院は、宮の御殿の西の渡殿の前の中の塀から東の庭を草原にお作らせになつた。閼伽棚も其方へ作られて艶な趣きであつた。宮の御出家のお供をして乳母など年の行つた者は尼になり、若い人達には、心が眞實に定つた上でないと不可いと仰せになるので、中で十幾人だけが許されて尼姿になつて侍して居た。前の草原には蟲が放たれて、夕風が少し涼しくなる頃、院は尼宮をお訪ねして來た。蟲の音を愛して居られる樣子を見せ乍ら、添臥をしようと宮を誘惑されようとして居た。今更かうした事はあるまじい行ひと、宮は恐しく思召した。人目には變りのない夫婦と見せ掛けて、あの祕密の折以來、汚れたものとして嫌惡し續けて來た自分の肉體を悲しむ心が出家の重な動機となつた自分ではないか、一切の愛欲を忘れ度い私にはこれは苦しい御要求である、いつそ六條院で無い所へ移り住んだら、ともお思ひになつたが、はきはき其れをお言ひになれる性質ではなかつた。

十五夜の月が未だ上らない夕方、宮は佛間の緣に近く坐つて念誦をして居られた。若い女房の二三人が、花を供へるために花皿を扱ふ音や水音を立てたりして居た。六條院が、

「大層蟲が鳴きますね。」

と、座敷へ入つて來られて御自身も宮の念佛にお合せになつた。多くの蟲の鳴く音の中に、鈴蟲の聲が殊に華かに聞かれた。

「中宮は遠い野原へまでも松蟲を探しにやつて、庭にお放ちになりましたが、それだけの效果は無いやうですよ。壽命の短い蟲なのですね。人の來ない山の奥とか松原などではよく鳴く癖に、人の庭では餘り鳴かない。意地惡な所があるのでせう。それと違つて鈴蟲は愛嬌があつて可愛い。」

と院が言はれるので、宮も、

大方の秋をば憂しと知りにしを振り捨てがたき鈴蟲の聲

と、お笑ひになつた。何ですつて、あなたに恨まれるやうな事は無かつた筈だがと院はお言

ひになつた。珍らしく院は琴を持つて來さしてお彈きになつた。珠數を爪ぐる事もお忘れになつて、宮は琴に聞き入つて居た。月が上つた。

例年の通り今夜は音樂の遊びがあるだらうと思つて、兵部卿の宮が來訪された。左大將も若い人達を伴れて院へ伺つたのであるが、此方の御殿に琴の音がするのでそつと出て來た。

「退屈でね。」

などゝ、院は兵部卿の宮の席も此方へ作つてお招きになつた。今夜は御所に月見の宴があるべきであつたが中止になつたので、寂しがつた人達が六條院へ集つて來るのであつた。蟲の音の批評や音樂の合奏もあつて面白い夜になつた。

「殊に、この中秋の月に向つて居ると、此世以外の世界の事までもいろいろと思はれる。何かにつけてさうだが、亡くなつた大納言が思ひ出されますね。」

御自身の樂音にも愁ひが催される風で、院は涙をお零しになつた。御簾の中で女三の宮は今の言葉に耳をお挾みになつたらうとも思ひ乍ら、故人が戀しくてお泣きになつた。

「今夜は鈴蟲の宴で明さう。」

かう院は言つておいでになつた。二度ほど杯が廻つた頃、冷泉院からお招きのお手紙を持つてお使が來た。御所の宴が中止になつたため、冷泉院へ左大辨、式部大輔などが參つて居たが、こちらへ左大將などが來て居る事をお聞きになつたのであつた。御機嫌を伺ひにも餘り上らなかつた自分であるのに恐れ多い、と、俄かな事ではあつたが、院は參院遊ばされた。

輕い直衣姿の人々であつた。月が稍高くなつて美しく更けた夜を、若い人にわざとらしくなく笛をお吹かせになつて、微行の御外出をされたのであつた。昔の源氏の大臣のお氣持ちでの突然の御來訪に、冷泉院は非常に喜ばれた。御美貌の冷泉院と六條院とはいよいよ別物であるとは見えなかつた。未だ盛りのお年齢に自發的に御退位遊ばした此の方を御覽になると、六條院は傷ましかつた。詩歌が作られて、明方に披講された。早朝に人々は院を退出した。六條院は中宮のお住居の方へお出でになつて暫くお話しになつた。

「只今はかうして御閑散なのですから始終伺つて、年と逆にますます濃くなる昔の思出などを

お話しもし承りもし度いとは思ひ乍ら思ふ樣にも參りません。近頃いよいよ私も思ひ切つて田舍の寺へ入る事にしようかと考へるのですが、後の人々をよろしく御庇護下さい。」

眞面目な樣子で院はお話しした。中宮は今日も若々しい柔かい調子で、

「宮中に居りました頃よりもお眼にかゝれる機會がだんだん少くなつて參りますのが、豫期しなかつた事なので、寂しう御座いましてね。皆樣が御出家なさる此世から自分も離れ度くても御相談も出來兼ねるので御座います。」

とお言ひになつた。

「さうですね。宮中にいらつしやる頃は年に幾度か御實家歸りを樂しんでお待受けも出來たのですがね。只今では形式通りのお暇を頂いて御實家住居をなさる事もお出來にならない樣になつたのも御道理です。もう陛下と后と申すよりも一家の御夫婦のやうなものですから、さして世をお厭ひになる理由のない人が斷然御出家になるのは至難な事です。斷じてそれは不可けません。」

と院がお止めした。自分の心が深く汲んで貰へないのかと、中宮は恨めしく思召した。六條の君が地獄に落ちて居るといふのは、何んな苦に浸つて居られるのか、死んだ後まで死靈などが殘つて人に憎まれて居るのが子として何んなに辛い事であらう、自分には六條院は隱して居られるが、誰が云ふとなしに自分の耳にした紫の女王の病氣の時に出た物怪、假りにも懷しい母の死靈と云ふそれは何んな事を言つたのであらう、と中宮は思ふのであつたが、正面からお言ひにはなれず、

「お母樣の靈魂が、罪の深いやうで苦しんでおいでになる事を、外から聞きました。死別れた事をたゞ悲しんで居て、後世の事までは幼稚な私は考へなかつたのですが、氣がついて見ますと、有難い僧に詳しいお話も承り、私の力で及ぶだけの罪の焰を消してお救ひもし度いと思ふのです。」

それとなしにお言ひになつた。それも道理とお思ひになつた院は、

「其焰は誰でも持たない譯には行かないものなのです。目蓮が佛に近い程の高僧になつて居た

爲め直ぐ母を地獄から救ひ出せもしたでせうが、さうでなく然も御自身の華かな人間としての生活を強ひて斷ち切つてお了ひになるのも、知らず知らずの中に煩惱を作る結果になるではありませんか。他の方法でお母様の妄執を晴らさせてお上げになるのが第一です。私自身もそれを十分にして上げ度い心は持ち乍ら、些細な絆しが殘るのを案じまして、中途半端な心で居ります。」

とお言ひになるのであつた。人生の果敢さなどを互ひにお話しになるのであつたが、未だ何方も出家などには緣の遠いやうな華かな姿のお二人であつた。

せめて功德を作る事で亡き母君の魂を弔ひ度いと、以前にも增して善行を積まうと精進遊ばされる中宮を助ける爲めに、六條院も法華經の八講などを近く行はうとなすつて居た。

夕霧

忠實な良人といふ評判があつた左大將であつたが、今は、女二の宮に心を惹かれて、表面は故人との舊交を忘れないといふ風にして、屢々一條邸をお訪ねして居た。然も此狀態から一歩も進めないでおかない覺悟は月日と共に堅くなつて行つた。御息所は此來訪によつて慰められるのを喜んで居た。眞心を盡す自分を認めて貰つて、自然に宮の心の自分に向つて來るのを待たうと、一日も早い宮との接近を、左大將は待つて居るのであつたが、宮が御自身でお話しになる事が未だ無かつた。

御息所は物怪に憑かれて、小野といふ村にある山莊へ病床を移した。御息所の昔からの祈禱僧の律師があつて、其人を比叡山の寺から呼ぶのに都合がよいからでもあつた。其折の車や前驅の人達は皆左大將が用立てた。却つて衞門督の兄弟達はそんな事はうつかりして居た。左大辨は兄の未亡人の宮を得ようとした事があつて、強い拒絶に會つて以來、羞恥から出入りもして居なかつた。御息所が修法をさせる事を聞いて、左大將は僧達に出す布施や淨衣などを用意して贈つた。御息所は御禮の返事も書けない容態であつた。女房が書くのも如何かと憚ばられて、奬められる儘に宮が手紙をお書きになつた。短いお手紙ではあつたが、字の美しい懷し味のあるのが愈々左大將の心を惹いて、それからは度々手紙を差上げるやうになつた。結局自分の疑ひが疑ひで無くなつて行くやうであると早くも見て取つたらしい雲井の雁の夫人への遠慮から、山莊へお訪ねはし兼ねて居た。

八月の二十日頃であつた。左大將は、

「某律師が珍らしく山から下つて居るので、是非相談しなければならぬ事がありますし、御息所の御病氣見舞もし度いから、小野へ行つて來ませう。」

と言つて、狩衣姿の五六人を伴れて出た。松ヶ崎の峯などは、もう紅葉がして居た。山莊は簡單な小柴垣を風雅にめぐらして居た。寢殿とも云ふ可き所の東の出座敷に祈禱の壇が設けられ、北側の座敷が病室になつて居た。その爲めに西向きの座敷に宮は居られた。物怪を恐れて御息所は京の邸へお留めしようとしたのであつたが、何うしても一所に居たいと從いてお出でになつた宮を、病室の方へはお近けしなかつたのである。客を通す座敷が外に無いので、宮の

お居間とは御簾で隔てた西の縁側に附いた座敷へ左大將を通した。上の女房らしいのが、御息所とのお話の取次ぎに出た。

「勿體ない程の御親切です。それに御自身でまでお見舞ひ下さいますあなた樣に對して、若し亡つて了つては自分で御禮を申上げる事が出來ないと考へまして、今少し生きて居なければならないと努めるやうになりました。」

と、御息所は女房に取次いで云はせた。

「此方へお出でになる日は、私もお供を致さうと思つて居たのですが、生憎六條院の御用が殘つて居て失禮致しました。其後も伺はうと思ひ乍ら、忙しかつたものですから。」

と左大將は云つた。狹い山莊の事であるから、奥といつても若い宮が其處においでになる氣配は大將によく分つた。柔い身じろぎなどを遊ばす衣ずれの音もした。魂を其座敷へ遣つて了つた樣な空ろな氣になり乍ら、左大將は女房の少將などを相手に話して居た。

「此方へ伺ふやうになつてから何年といつてもよい程になるのですが、未だ極めて他々しいお

扱ひを受けるのが、怨めしい氣がしますよ。かうして御簾の前で人傳てのお言葉がある丈けですからね。何んなに氣の利かない男だと皆さんが思つて居らうかと恥しくなります。」

かう云ふ左大將は、もう輕々しい多情多感な青年で無く、重々しい所が加はつて來て居る人なのであつた。拙い御挨拶などをしては却つて不可いから、などゝ途方に暮れた女房達は互にひそひそと言つて居たが、あゝお云ひになるのですから何とか仰つて頂き度い、と宮に申上げたのであつた。

「病人に代りまして私でもお逢ひ申上げれば宜しいのですが、一時病人が大變惡かつたものですから、私までも體を惡く致して據所なく失禮申上げます。」

宮はお取次がせになつた。

「それは宮樣のお言葉ですか。」

と大將は居ずまひを正した。

「御息所樣の御容態を、私自身の病氣以上にお案じ致して居りますのも、何の理由からで御座

いませうか。御心配の餘り宮樣がお體を害ねてはならないと心配だからで御座います。その私の誠意をお認め下さらぬのは怨めしい氣が致します。」

大將の言葉に女房達も、御道理な事と云つた。夕方が近づいた。山蔭の山莊の庭はうす暗くなつて、頻りに蜩が鳴き、垣根の撫子が風に動くのも趣きがあつた。亂れた茂みの中を行く水の音がかすかに涼しく、凄い程に山風が松の梢を鳴らして居た。不斷經の僧の交代の時間が來て鐘が鳴り、前の僧と後の僧の聲が一時一所に高く聞えるのも尊かつた。左大將の物思はしさは募るばかりであつた。歸る氣などには少しもなれなかつた。律師は錆びた聲で陀羅尼經を讀み出した。御息所の病苦が加はつたらしくて、女房達は多く其方へ行つて居て、宮のお傍には極く僅かな女達であつた。此の靜かな時に自分の心をお告げす可きであると左大將は思つて居た。霧が軒の處まで這つて來た。

「歸る道が見えなくなつてゆくかう云ふ時には、何う致したらいゝのでせう。」

山里の哀れを添ふる夕霧に立ち出でんそらも無き心地して

と左大將は申上げた。

山賤の籬を籠めて立つ霧も心空なる人は留めず

と仄かにお答へになる宮の優雅な御樣子に、左大將は愈々歸る事を忘れて了つた。

「何うする事も出來ません。道は分らなくなつて了つたし、此方はお追ひ立てになるし。」

などゝ、腰を落付けて了つて、思ひ餘る自分の心を仄めかして語る左大將には、これ迄は氣のつかない風を裝つて來て居た宮はお困りになつて了つた。宮が一層口重になられたのを、左大將は歎息した。こんな機會は又とある譯が無い、輕率な人間にお思ひにならうとも仕方が無い、せめて長く祕めて居た苦しい思ひだけでも囁き度いと、左大將は思つた。左大將は從者のもと右近衞府の將監で五位になつた男を窃つと近くへ呼んで、

「此方へ來て居られる律師に是非逢つて話す事があるのだが、御病人の御祈禱などで疲れて、律師も御休息をしなければならないであらうから、私は此方へ泊つて、初夜のお勤めが終つた頃に律師の居る方へ行かうと思ふ。此の山莊の方に二三人だけ殘つて、あとの者は、栗栖野が

近い筈だから彼方へ泊るやうにして呉れ。こんな外泊も人の中傷の種になるものであるから氣を付けて。」

と命じた。譯のある事に違ひないと思つて其男は退つて行つた。それから女房に、

「道も分らなくなりましたから、此方で御厄介になりませう。此の御簾の前を拜借します。律師の御用が濟むまでですから。」

と云つた。宮はお困りになつた。隣の室へ立つのも態とらしいので、たゞ音を立てぬやうにして其儘でおいでになつた。左大將は、戀の言葉を盡して宮をお動ししようとして居たが、お取次にゐざり入る女房の後から、窃つと御簾を潜つた。夕霧が盛んに家の中へ流れ込むので座敷の中は暗かつた。驚いて女房はふり返つた。恐ろしくなつて、宮は北側の襖子の外へゐざり出ようと遊ばしたが、直ぐに大將は手でお引留めした。お體は隣の間へ入つて居たがお召物の裾が此方に引かれて居た。掛金も此方にある。宮は水のやうに冷くなつて慄へて居られた。女房達も茫然となつて居た。無理に其手を宮のお召物から引放す事も出來なかつた。あなた樣が

こんな事をなさらうとは、と女房は泣かんばかりに退去を賴んだが、左大將は、

「これ程の近さで私がお話し申上げようとするのが、何故あなた達には不思議なのだらう。」

と、今は優美な落付きを失つて、種々宮をお口說きした。こんな侮辱までも忍ばなければならないのかと、御無念さが宮のお心に湧くばかりで、何をお云ひになる事も出來なかつた。

「餘りに少女らしいではありませんか。思ひ餘る心から、强ひて此處まで參つて了つた事は無禮には違ひありませんが、これ以上の事をお許しが無くて致さうとは思ひません。何れ程煩悶に煩悶を重ねて參つた私か、自然お眼にも留つて居る筈です。片思ひの苦しさを聞いてだけは頂きたいと思ふだけの事で御座います。」

宮は襖子を手で抑へておいでになつた。

「お氣の毒です。こんな物で私の熱情をお塞きになれると思召すのですか。」

と左大將は笑つて居たが、聽てお傍へ寄つた。然し御意志を尊重して、無理を敢へてする左大將ではなかつた。宮は柔味のある貴女らしい艶な所を十分に備へておいでになつた。續くお

物思ひにほつそりと痩せておいでになるのが、お召物の上から左大將に分つた。焚きしめた薫りに深く包まれて居られる事も、柔かに男の官能を刺戟した。夜も更けた。虫の音、鹿の聲に瀧音も一つに混つて艶な夜であつた。格子も下さぬまゝで、落ち方になつた月の光の射し入るのも左大將の心を悲しくした。

「餘りに私のこの心を無視なさるので、知らず知らず私にも危險性が育まれて行く氣が致します。男とは何んなものか、過去に御存知で無いあなた樣でも御座いますまい。」

こんな事まで聞かされる宮は、薄命な女は自分であると、深くお悲しみにもなつた。大將の挑んで來るのが死ぬ程苦しく思召された。

「これまでの私の運命が、何んなに拙いもので御座いましても、それだからと申して、これを肯定しなければならないとは思はれません。」

宮は仄かな可憐な泣聲をお立てになつた。

「もう仕方が無いと思召して下すつたら如何ですか。」

大將は微笑しながら、月の光が射す方へ一所に出ようと奬めるのであつた。宮はぢつと冷淡にして居られたが、雜作もなく大將はお引き寄せした。

「最も清い戀をする私であることをお認め下すつて、御安心下さい。お許しが無くては決して決して——」

明方近くになつて居た。霧にもまぎれず月の光りがさし込んで來た。廂の短い山莊の軒は空を廣く室へ容れて、月と向ひ合ふのが恥しくて隱れるやうにして居られる宮の御樣子は艶であつた。故人の話も靜かに左大將はした。そして、故人よりも自分を劣つたやうにお取扱ひになる事を恨めしがつた。故人は此人に比べて低い地位に居た人であつたが、院も母君も御同意の下に、自分は其人の妻になつた、自分は男の心の表面ばかりの愛に寒い思ひをして居たのである、今かうした淺間しい戀に落ちては、故人の妹の婿である左大將との名の立つ自分を太政大臣家では何う云ふであらう。世間からも謗られようが、それよりも朱雀院がお聞きになつたら何う思召す事であらう。さぞお歎き遊ばすであらう、かうお思ひになると宮は情なくおなりに

なつた。自分には疚しい所も無く大將の情人で斷じて無くても、噂は何んな風に立てられる事か、御息所が後でお聞きになつて、幼稚な心から解き難い誤解のもとを作つたとお言ひになる事も佗しく想像遊ばされた。宮は、

「せめて、朝までおいでにならないでお歸り下さいまし。」

とお促しになるより外はなかつた。

「戀の成り立つた人のやうに分けなければならない草の露にも、私は恥しい。悲しいことですね。それではお言葉通りに致しますから、私の誠意だけはお汲み下さい。上手に追拂つて了つたのだといふ風を今後お見せになる事が御座いましたら、其時はもう私も、自分の情熱のなすが儘に任せますから。」

淸い儘で、思ひ切つて歸らう、自分自身の思出にも不快に殘る事であつてはならないと、深い霧に隱れて左大將は歸つて行かうとした。魂は空ろになつた氣持ちであつた。

荻原や軒ばの露に濡ちつゝ八重立つ霧を分けぞ行くべき

「あなたも濡衣からお逃れになれませんよ。これも、無情に私を追拂ひ遊ばす罰とお思ひになる外はないでせう。」

「酷い目にお合はせになるのですね。」

噂は何うしても立たう、それも仕方が無いと思召した宮は冷やかにさうお言ひになつた。それが美しく貴女らしく見えるのであつた。種々と煩悶をしながら大將は歸つて行つた。山の朝露は冷かつた。

濡れた姿を夫人に見咎められることを恐れた左大將は、六條院の東の花散里夫人の住居へ行つた。朝霧は未だ晴れなかつた。町でこんなであるから、山莊の人は何んなに寂しい霧を眺めて居られることであらうかと左大將は思つた。珍らしくお忍び歩きをなすつたのですよと、女房達は囁いて居た。養母の用意して居て呉れた着物に着替へて、朝の粥を食べた後、夕霧の大將は夫人の居間へ入つて行つた。送られた大將の手紙を、山莊の宮は讀まうともなさらなかつた。此問題について御息所に何う申したらよいのかと御煩悶にもなつた。世間の噂の立つて居

る事を親には祕密にして置く、それがお出來になれないのであつた。昨夜の二人の關係が何の程度にまで進んだのか女房達は疑つて居たので、其手紙が眞相を說明して呉れるであらうと思ふ好奇心から、宮がお讀みになる時に盜み見をし度いと願つて居た。

「全然御返事を遊ばさないのも、賴り無い御性質のやうに想像をなさるでせうから。」

と、女房が手紙を擴げると、宮は、

「意外な事で男の人を近づけて了つたことは、皆私自身の輕率が惹起した過失だと思ふが、思遣りなく見くびつた人を憎む心が私には未だ消えないのだから、讀まなかつたと云つてやるといゝ。」

と横におなりになつて了つた。手紙には、

魂をつれなき袖に留め置きて我心から惑はるゝかな

「外なる物はなどゝ歌はれて居りますから、昔も既に私程に苦しんだ人があつたのであると、自ら慰めようとは致すのですが、魂はなほ身に添ひません。」

などゝ長々と書かれてあつた。女房も盡く讀む譯にも行かなかつた。事の成立つた後の書き方では無いやうに思はれもしたが、疑ひが消えたのでも無かつた。御息所は未だ少しも此事は知らなかつた。

物怪で煩つて居る病人の常で、昨日とは全然違つて、御息所は今日は平常に近い氣分になつて居た。晝頃日中の加持が終つて律師だけが病床に近く陀羅尼を讀んで居たが、突然、御息所に、

「左大將は、何時頃から宮の所へ通つて來ておいでになるのです。」

と問うた。

「そんな事はありません。亡くなられた大納言の親友で、遺言があつて宮の事も賴まれたので、御親切によく訪ねて下さるのです。もう何年も續いてです。こんな所へまで私の病氣をお見舞に來て下すつて、勿體ないと思ひました。」

「私にお祕しになる事はありませんよ。今朝、後夜の勤めに此方へ參つた時、西の妻戸から立

派な若い男が出てお出でになつたので、霧が深くて私にはよく見えなかつたが、弟子達は、大將がお歸りになるのだ、昨夜車を歸してお泊りになつたのを見た、と口々に云ふのです。併し此御關係は結構な事ではありませんよ。あの方のお祖母様に當る宮様のお頼みで左大將の小さい時からよく祈禱をして上げて居たのでよく知つて居ます。よくない事には奥様の勢力が強くて全盛な一族を背景にして居るのですからな。お子様ももう八人でせう。此方の宮様がお勝ちになる事は難しいでせう。女と云ふ罪障の深いものに生れて來て、長夜の闇にさ迷ふのもかうした關係から生じる煩惱が本になつてです。」

律師は頭を振り立て乍らかう云つた。

「何うも私には腑に落ちません。昨日は私が餘り苦しんで居たものですから、暫く休息をしてから話さうとお云ひになつて彼方にいらつしやると女房達は言つて居ましたが、そんな風で夜明けまでおいでになつたのでせう。至極眞面目な堅い方をそんな風に言ふ人があるとは。」

と、なほ不審を抱く風を見せ乍らも、御息所は心の中では、そんな事があつたか知れない、

宮を戀しくお思ひする風は折々見えたが、自分も油斷をして居た、お傍に人も少いのを見てお居間へ入るやうな事もあつたのかと、思つた。律師が立つた後で、御息所は少將を呼んで質した。

「何故私に委しく報せて呉れなかつたの。人の言ふやうなことは決してあるまいとは思つて居ても、不安でならない。」

宮に氣の毒に思ひ乍らも、少將は、昨日の事を始めから詳しく話した。今朝の手紙の内容なども話した。

「長く抑へ續けておいでになつた心をお知らせなさらうと云ふだけの事かと存じます。宮様への敬意をお失ひになるやうな事は御座いませんで、朝早くお歸りになつたのですが、外の人は何んな風に申上げたのでせう。」

それが律師とは知らずに、誰か密告をした女房があつたのだと少將は思つて居た。御息所は何も言はずに、殘念相な表情をして居たが涙がはらはら零れた。それを見ると、少將は、何故

有りの儘の事を自分は言つて了つたのだらう、病苦の上に此煩悶で御病人は何んなに堪へ難い事であらう、と後悔した。そして、

「障子は閉めた儘で御座いました。」

などゝ少しでもよい様にとりなさうと努めた。

「そんな事は何うでも、何故そんなに近くへ男の寄るやうなことを宮がさせて了つたのであらう。疚しい事は無くとも、何う人に言譯をすればよいか。」

何にしても確りして居ない女房ばかりが附いて居たから、と思つても、口へは出して言へなかつた。

「今日のやうに私の氣分の少しよい間に、宮様に、此方へお出で下さるやうに申上げなさい。彼方へ伺ふ筈だが動けさうも無いのだからね。隨分長くお眼にかゝらない氣がする。」

御息所は眼に涙を浮べて居た。少將は此言葉を宮にお傳へした。宮は御息所の所へ行かうと遊ばされて、額髪の涙で固つたのを直したり綻びて居た單衣を着更へたりなすつたが、お氣が

進まずぢつと坐つておいでになつた。此女房達も何う自分を見て居るのであらうなどゝ思ふと恥しくて、宮は又横になつて了はれた。

「此儘病氣になつて死んで了ひ度い。脚から逆上が上つて來るやうだから。」

と云つて、宮は脚をお揉ませになつた。

「御息所様に昨夜の事を仄めかしてお話した人があつたので御座いますよ。眞實の事が聞きたいとお言ひになるので、正直にお話し致しましたが、たゞ襖子だけは斷然開いたので無いやうに申上げて置きましたから、そのおつもりでおいで下さいまし。」

と少將は云つた。御息所が悲しんで居る事は申上げなかつた。それだからお呼びになつたのかと一層佗びしくお思ひになつた宮は何もお言ひにはならなかつたが、枕から雫が落ちて居た。此問題ばかりで無く、自分の意志でも無くした結婚でもあの方に物思ひばかりをさせた自分である、と宮はお歎きになつた。清い自信があるにしても、あれ程異性と近く夜の何時間を過した事は有り得る事でも無く、有つてよい譯のものでも無いと思ふと、御自身の運命の悲しさに

憂鬱になられた。夕方又お迎へがあつたので、間にある座敷倉の戸を開けさせて宮は東の病室へお出でになつた。宮は平生の作法通りに身を起した。

「二三日お眼にかゝらなかつたのが、何年もお會ひ出來なかつた程に寂しいのも味氣ない事でございます。親子の縁では、未來で必ずお逢ひ出來るとも限らないので御座いますからね。」

などゝ御息所は泣くのであつた。宮も種々な事がお心に積つた悲しさに、何もお云ひになれず、たゞ母君の顏を眺めておいでになつた。非常に内氣な方なので思ふ事もはつきりはお告げになれなかつた。それがお可哀想で御息所も昨日の事をお訊ねする事が出來なかつた。灯を早く點けさせて、夕食も此方で宮に上げる事にした。今朝から何も召上らない事を聞いて居たので御息所は手づから膳の上を直したりしてお勸めするのであつたが、宮は箸を取らうともなさらなかつた。たゞ御息所の容態が少し良さ相なのがお嬉しく思はれた。夕霧の大將から又手紙が來た。事情を知らない女房はそれを受取つて、大將から少將へと云ふお手紙が、と言ふので、宮のお心は更に悲しくおなりになつた。少將は直ぐに急いで受取つた。

「何んなお手紙。」

と問うたが御息所の心は騷いで居た。

「御返事はなさい。仕方が御座いません。一旦立つた名は誰が取消して呉れませう。」

と言つて、御息所は、心では困つて居る少將から手紙を受取つた。それには、

「冷かなお心を知つて、却つて衰へ難い戀になつて參ります。」

塞くからに淺くぞ見えん山川の流れての名を包み果てずば

などゝ書かれてあつた。宮はお書きにならない。御息所は、

「宮樣は只今此方へ私を見舞ひにお出でになつて居ります。お奬め申上げても、御返事はお書きになれませんから、私が代りまして。」

女郎花萎るゝ野邊をいづことて一夜ばかりの宿を借りけん

と書いたゞけで、卷いて出した。其儘又病床に戻つた御息所は苦しみ出した。僧なども皆呼び集められて祈禱させるなど、病床は混雜して居た。一所に死なうか、と思召して宮はお歸り

にならなかつた。

夕霧の大將は此日の晝頃から三條の家に居た。今夜又小野の山莊へ行く事は、未だ無い事實も有つたらしく人に思はせる事にならうと、行き度い心をぢつと抑へて居た。昨日の事は雲井の雁の夫人も聞いて居たが、さり氣なく自身の居間の方で子供の相手をし乍ら横になつて居た。八時過ぎに山莊からの返事が屆いたが、大病の人の書いた字は讀み難かつた。大將は灯を近くへ持つて來させてよく見ようとして居た時、彼方に居た夫人は窃つと寄つて來て背後から奪つて了つた。大將は驚いて、

「何をするのです。六條の東のお母樣のお手紙ですよ。今朝風邪でお惡かつたが、院の御前で御用をしたまゝ今一度お訪ねも出來なかつたので、手紙を持たせて上げたのではありませんか。御覽なさい。戀の手紙といふやうなものゝ書方ですか。年月が經つと共に私を侮る事がひどくなるのは困る。女房達の前もあるし。」

と歎息をしたが强ひて取戻さうともしないので、流石に夫人も此場で讀む事もせずにぢつと

手に持つて居た。雲井の雁の夫人は、

「年月の經つに隨つて侮るなどゝ、御自身がさうなので、私をまで憶測なさるのです。」

と、餘りに眞面目な顏をして居る大將に氣おくれがして、甘えて見せた。

「それは何ちらでもいゝ。世間にもある事だからね。併し、相當な身分の男で唯一人の妻を守つて居るやうな私を何んなに人が笑つて居る事であらう。そんな變屈な男に愛されて居る事はあなたにとつても名譽ではありますまい。大勢の妻妾の中で勝れて愛される人こそ他人からも尊敬されるのですから。」

大將は騙して取返して了ひたかつた。夫人は派手に笑つた。

「それですから私が苦しいのですよ。俄かに、すつかり眞面目でなくおなりになつたのですもの。私にはさうした習慣がついて居ないのですから。」

と恨めしがるのも憎くはなかつた。俄かにと思ふやうな事が自分の何處にありますか、疑ひ深い、などゝ大將は云つて居た。雲井の雁の夫人は奪つた手紙は何處かへ隱して了つた。冷靜

を裝つて寢に就いたものゝ、大將は手紙の內容は何んなのであつたらうかと思ふと、眠る事も出來なかつた。夫人が寢入つて了つたので、宵に居た敷物の下などをさり氣なく探したが見つからなかつた。翌朝は、良人が餘り欲しがらない手紙なのであるから矢張戀の手紙ではなかつたのであらうと夫人は思つて居た。そして子供の世話の忙しさに紛れて、手紙の事も忘れて了つた。大將はたゞ手紙が欲しかつた。小野の山莊へ今朝は早く消息を上げたいと思つても、昨夜の手紙に何が書かれてあつたかも知らず書くのも拙い事になると、煩悶された。壹頃になつて、大將は思ひ餘つて夫人に云つた。

「昨夜のお手紙には、何と書いてあつたのでせう。これからお見舞ひをしなければならないのだが困つて了ふ。私は氣分が惡くて六條へも行きたくないから、手紙で云つて上げなければならないが。」

「先夜の山風に體を惡く致しましたので、とお書きになればいゝでせう。」

隱した手紙の事はきまりが惡くなつて、夫人はそれには一言も觸れなかつた。大將は、

「つまらぬ事ばかり言ふのですね。こんな堅い男を疑ふあなたが女房達に嘲はれますよ。」

と戲談にして又、昨夜の手紙は何處にありますかと云ふのであつたが、夫人は出さうとしなかつたので外の話などをして暫く寢た。

日が暮れた。蜩の聲に驚いて目の覺めた大將は、今頃山莊の庭は何んなに霧が深いであらう、何ういふ風に手紙を書いて送つたものかなどゝ思つて居た。何でも無い風に硯の墨を磨つて居た。大將の目は、ふと敷物の奥の端が少し高くなつて居るのに氣がついた。上げて見ると昨夜の手紙が出て來た。それを讀んだ大將の鼓動は急に高くなつた。結婚を强ひて成立させたものとしてそれが書かれてあると思ふと、心苦しかつた。第二の夜の昨夜自分が行かなかつたのを御息所は何んなに煩悶した事であらう、今日も未だ手紙が上げて無いではないかと思ふと、夫人が怨めしくも憎くもなつた。手紙を隱すやうな事も皆自分が付けさせた我儘な癖かと思ふと自分自身に對する反感も覺えて、泣きたい氣がした。

これから直ぐに行かうとも大將は思つたが、宮はお逢ひになるまい、それに妻は昨夜から嫉

妬を續けて居るし、などゝ思ひ續けて、先づ御息所への返事を書いた。

「珍しいお手紙を拜見致しました。御病氣をお案じ申上げる方から申しても非常に嬉しい事でしたが、お咎めの事は何か御聞き違へでは御座いませんか。」

秋の野の草の繁みは分けしかど假寢の枕結びやはせし

宮へは又長い手紙を書いた。そして厩の中の脚の早い馬に乘せて前の夜の五位の男を小野へ遣つた。昨夜から六條院の御用で行つて居て今歸つたばかりだと云ふやうにとも命じた。

山莊では、大將が昨夜も來ず、三日目も朝から手紙の無いのを苦にして、御息所の容態は惡くなつて行つた。御息所はぢつと宮を見つめて、

「何うした運命で、かうした不幸な目にばかりお逢ひになるのであらう。」

などゝ云つて居る中に、容態は變つて行つた。呼吸が急に止つて體も冷え入るばかりになつた。律師も慌てゝ大聲に願を立てなどした。此騷ぎの中で、大將の消息が來たといふ者の聲を御息所は仄かに聞いた。それでは今夜も來ないのか、情ない、何故自分はあゝした手紙まで書

いてやつたらう、と煩悶する中に御息所の息が絶えた。一所に死んで了ひたいと思召す樣に宮は母君の遺骸に取りすがつて居られた。女房達は、

「もう仕方が御座いません。そんなにお歎きになつても、お亡りになつた方がお歸りになるものでは御座いませんからね。これではお佛をお迷はせする事になりますから。彼方へお出で遊ばせ。」

と申上げても宮は體が辣んでお動きになれなかつた。僧達は祈禱の壇を壞して居た。弔問の使が方々からあつて、何時の間に知れたかと思ふ程であつた。夕霧の大將も非常に驚いて早速使を立てた。六條院からも、前關白家からも來た。御寺の朱雀院からも御愛情の籠つたお手紙があつた。此御消息が參つたので、悲歎に溺れて居た宮も初めて顏をお上げになつた。涙でお目もよく見えなかつたがこの御返事はお書きになつた。平生から直ぐ火葬にするやうにと言つて居た御息所であつたから、今日の中に火葬にする事にして、故人の甥の大和守が萬端の世話をして居た。入棺の最中に、夕霧の大將が來た。宮のお悲しみも思はれて、そんなにまでお驅

付けになる事も御座いますまいと言ふ家從等の諫めも聞入れずに來たのであつた。西の緣側の方へ大將に廻つて貰つて、少將が應接に出た。大將も急にはものも言へなかつた。稍暫くたつて宮への弔問の御挨拶を申入れた。大將の事が原因になつて、免れ難い運命とは云へ、母君は亡なつたかと思召すと、宮は其人が恨めしくて、御返事が無かつた。

「何う申上げたら宜うございませう。あれ程の方が此の遠い所をお出で下すつたのですから、御好意を無視遊ばすやうなのも餘りでございますから。」

「いゝやうに言つてお置き。何と云つていゝか、今私にはそんな事は分らない。」

宮はかう云つて横におなりになつた。それも道理と思はれたので、女房は、

「宮は、お薨れになつた方も同樣でいらつしやいます。お出で下さいました事は申上げて置きました。」

と大將へ言つた。此人達も涙に咽せかへつて居た。

「いづれ、宮樣の御氣分もお靜まりになつた頃に又來ませう。何うしてこんなに急にお亡なりになつたのかしらん。」

露骨でなく御息所の最後の煩悶の有樣を、少將等は大將に告げた。大將は、近くの自分の莊園から手傳ひの者を寄越さす事にして、歸つて行つた。そのために、大和守が、大將の厚情のお蔭ですと云つた程、葬儀は思ひの外に派手になつたのであつた。大和守などは、此處から移つたら又悲しみも紛れようとも申上げるのであつたが、宮は山莊から移らうともなさらなかつた。

山風が烈しくなつた。寂しさが身に沁む季節であつた。空の色にも悲しみを誘はれて、宮は歎き續けておいでになつた。夕霧の大將からは毎日のやうにお見舞ひの手紙があつた。寂しい念佛僧を喜ばせるやうなものも屢々贈られた。眞情を述べた其の手紙も、宮は手に取つて見ようともなさらなかつた。あのいまはしかつた事件が母君を悶死させた事を思ふと、大將に觸れた事を聞いても恨めしくて大聲にお泣きになるので、女房達も手の出しやうがなかつた。

始めの中は、悲しみの餘りに御返事も無いのであらうと思つて居た大將も、これでは人情が

解らな過ぎると恨めしく思ふやうになつた。夫人の雲井の雁は、山莊の宮と良人との關係は何うなつて居るのであらう、御息所とは始終手紙の往復があつたやうであるがと、腑に落ちないので、夕方の空に眺め入つて居た良人の所へ短い手紙を若君に持たしてやつた。それには、

哀れをも如何に知りて『か慰めん有るや戀しき無きや悲しき

「何ちらでせうか。」

とあつた。大將は微笑し乍ら、嫉妬が夫人に種々な事を言はせるものであると思つて居た。人生の事が總て悲しい、と書いて夫人に返した。戀しさを抑へ兼ねた大將は、小野の山莊を訪ねた。四十九日も過ぎてから靜かに事を運ぶ方がいゝとは知つて居たが、それまでは待てなかつた。もう噂を恐れる必要も無い、いづれ成立つて了ふ結婚であるから、と思ふと夫人の嫉妬も眼中に無かつた。未だ宮のお心が自分へ傾く事は無くとも、あの御息所の手紙が自分の所にある以上はといふ恃む所もあつた。九月の十幾日であつた。山風に木の葉も峰の葛の葉も爭つて散る音の中から念佛の聲だけが聞えて、山莊の内には人氣も少かつた。垣の直ぐ外に鹿が來

たりして、山の田に百姓の鳴らす引板の音にも驚かず黃色くなつた稻の中で鳴く聲にも愁ひがあるやうであつた。瀧音が物思ひをする人を威嚇するやうに響いて居た。叢には蟲だけが弱つた音を立てゝ、枯草の中から莖を長く出して龍膽が咲いて居た。柔かな直衣の下に濃い紫が見えて、光の弱つた夕日に眩く扇をかざした大將の手は美しかつた。大將は少將を呼び出した。誰が聞いてゐるとも知れぬ不安があつて聲高には話せなかつた。この遠い道をお訪ねして來た自分の誠意を認めて下すつたら、今少し親密なお取扱ひもあつてよからうにと思ひます、霧が深くなつて來ましたよ、と大將は山の方を眺めた。もつと近くへと言ふので、少將は鈍色の几帳を御簾から少し押出す程にし乍ら、裾を細く卷くやうにして近くへ寄つた。大和守の妹で御息所の姪である此人は、濃い黑を重ねた上に黑の小袿を着て居た。

「何時までも冷かな宮樣が怨めしくばかりあつて、外の頭は空虛ですから、私は、誰からも怪しまれます。もう私には堪へる事も出來なくなりました。」

御息所の最後の手紙に書かれてあつた事も言つて、大將は泣いた。少將も泣いた。あなたか

ら宮様の私に對する御冷酷さをお改めになるやうによくお話し下さい、などと大將は云ふが、少將は返事も出來ずに歎息して居た。鹿がひどく鳴いた。

里遠み小野のしの原分けて來て我もしかこそ聲も惜まぬ

と大將は言つた。大將の言葉は宮へ取次がれもしたが、

「此の悲しみの中から自身を取戻せる日が御座いましたら、其の時に御禮も申上げられるかと思ひます。」

といふ御返事だけであつた。大將は失望して歸つて行つた。車の中から、身に沁む秋の終りの空を眺めて居ると十三日の月が華かな光を地上に投げかけた。歸り途に、大將は一條の宮の前で車を暫く留めさした。前よりも又荒れた氣のする宮邸であつた。南西の土塀の崩れた所から覗いて見ると、建物の戸は皆下ろされて人影も無く、月だけが前の流れに浮んで居た。家へ歸つた大將は、其儘緣に近い座敷に、戀人の冷たさを歎いて居た。良人のこの變り方は、雲井の雁の夫人には悲しかつた。これは心が外へ飛んで行つて居る狀態なのであらう、さうした事

に馴らされた六條院の夫人達をよい例にして、自分を思遣りの無い女のやうに云ふ良人は無理だ、珍しく忠實な良人を持つ者として親兄弟や世間からもあやかり者のやうに云はれて來た自分であつたが、と歎かれた。夜明けに近かつた。夫婦は何ちらも離れた座敷に身を背けた儘何を云はうともしなかつたのである。朝霧の晴れ間も待たれぬやうに、大將は又山莊への手紙の筆を取つて居た。雲井の雁の夫人も奪はうとはしなかつた。大將がしばらく手紙を眺め乍ら低い聲で讀んで見るのが夫人の耳にも入つた。

何時とかは驚かすべき明けぬ夜の夢覺めてとか云ひし一言

と書かれてあるらしかつた。朝おそく山莊から返事が來た。濃い紫色の堅苦るしい紙へ少將が書いたものであつた。今日も又自分達の力では宮をお勸しする事が出來なかつた、お氣の毒なのであなた樣のお手紙へむだ書きをなすつたのを竊つと盜んで來たからと書かれてあり、其所だけを破つたのが入れてあつた。それは辛うじて、

朝夕に泣く音を立つる小野山は絶えぬ涙や音無しの瀧

と判讀された。寂しいお心に合ひ相な古歌なども書かれてあつた。戀をして居る人が喜んだり悲しんだりして居るのを馬鹿げた事と思つて見て居たが、さて自分の事になると戀する心は堪へ難いものである、何うしてかう迄なつて了つたのかと大將は反省しようとするがそれも空しかつた。

六條院も大將の戀愛問題をお聞きになつた。御自身の青春時代の好色な名をお取りになつた不面目を此人が贖つて呉れるもののやうに、今迄頼もしく思つて居られたのであるから、裏切られたやうな寂しさをお覺えになつた。その相手が全然關係の無い處の女性で無く、女二の宮なのであるから、舅の大臣が何うお思ひになるであらう、これも宿命であらうかともお考へになつた。御自身の經驗から、御自分の死後、夕霧の大將が紫夫人を戀するやうな事もありはしないかといふ事も不安になると紫夫人へお言ひになつた。女王は顏を赤くして、自分があとに殘らねばならぬ程早く御世から去つてお了ひになるお心かと、恨むやうな樣子であつた。

夕霧の大將が六條院へ來た時、院は實狀を知り度く思召した。

「一條の御息所の忌がもう濟んだらうね。時はずんずん經つね。私が隱棲の望みを起してからもう三十年にもなる。あぢきない事だ。」

「此世に未練は無からうと思はれる人でも、逝世は中々出來ないものらしう御座いますからね。」

などと言つて、大將は又、

「一條の御息所の四十九日の佛事なども大和守一人の手でやるのですから氣の毒です。よい身寄りの無い人は、死んだ後などになつて見ると氣の毒なものです。」

と云つた。

「佛事は朱雀院からもお世話をされるだらうよ。女二の宮が何んなにお歎きであらう。近年になつて、私はあの御息所は相當に立派な婦人だと思ふやうになつた。院の後宮の才女には違ひなかつた。院もお悲しみになつたと云ふ事だ。女二の宮は、此處の宮の次の御愛子だつたのだよ。屹度お立派だらう。」

「さあ。御息所は無難な女性と見受けましたが。」

女二の宮の事は話題にせず、大將は素知らぬ風をして居た。此れ程の强い心でして居る戀は、親の言葉位るで思ひ切らせる事の出來るものでは無いと院はお思ひになつて、何の忠告も遊ばさなかつた。大將は、故人の法事をするのに盡力して居た。こんな評判が前大臣家へも聞えて行つた。不都合な話であると、女性の側の惡いやうに其處では思つて居た。

小野の山莊で遁世の人になつて了ひ度い希望が、宮にはあつた。それを御寺の朱雀院へお報せした者があつたので、度々、

「それは宜しくない。自分が僧になつて居る上に、三の宮も出家して居る。今又、二の宮がさうしては、子孫の絶えて行く一家とも見られる事にならう。世の中を捨てた自分にとつては構はないやうなものであるけれども、不幸な時に此世を捨てるのは見苦しいものです。自然に悟りが出來て來る時節をお待ちなさい。」

などと院の御忠告があつた。大將との戀愛事件はお耳に入つて居た。男の愛が十分で無い爲

めに悲觀して尼になつたと世間から見られるのも宮の爲めにはならないとも思召し、さうかと云つて公然大將の夫人になつてお了ひになるのも、姫君の完全な幸福とお認めになれなかつた。此問題に觸れて云ふのは宮が羞恥に堪へられぬ事であらうと思召して、院は素知らぬ風をなすつて居た。

夕霧の大將も今は、宮が結婚を御承諾になる迄待つ事はもうせずに、御息所の希望した事であつたからといふやうに世間へは思はせて、思ひ切つて、夫婦にならうと決心した。山莊を引上げて一條の邸へ宮のお移りになる日も凡そ何日と此方で決めて、大將は、大和守に命じて儀式の用意などをさせて居た。邸も修理を加へて、中の裝飾なども新しくした。當日は大將自身が一條に來て居て、車や前驅の人達を山莊へ迎へに出した。宮は何うしても山莊を出ないとお云ひになる。大和守も、

「私も、もう任地へ戻らねばなりません。あとのあなた樣のお世話を誰に賴んで參つたらよいのです。昔の內親王樣方にも、かうした事はいくつも有つた事で、皆運命なのですから、何も

あなた様お一人が世間の非難をお受けになる筈は御座いません。大將樣のあれ程の御志をお退けになるのは、餘りに御幼稚と申す外は御座いません。」

と申上げて、又、かうした事になつた最初の動機はあなた方の不注意からであると、少將などを責めもした。口々にお促しする女房達に反抗も出來ず、宮は着更へさせられる儘になつて居た。切つて了ひ度く思召す髪も前へお引寄せになつて御覽になると、六尺程の長さで前よりは少し減つて居た。他の者の目には矢張り極めて美事なものに見えるのであつたが、御自身では、非常に衰へて了つて、最早結婚などの出來る自分では無いと、宮は又お體を横へてお了ひになつた。

「時間が違つて參ります。夜も更けて了ふでせう。」

などと供の人達は騒いで居た。時雨が慌しく山莊の屋根を敲いた。宮は、

上りにし峰の煙に立ち交り思はぬ方に靡かずもがな

とお口誦みになつた。此頃は鈦などは皆人が隱して了つて、お手づから尼におなりにはなれ

なかつたのである。宮の櫛、手箱や唐櫃などは皆運ばれて居た。宮はお一人が殘る事もならずに泣く泣く車へお乘りになつた。此山莊へお出でになつた時、病苦があり乍らも母君は自分の髪を繕つて呉れて車からお下しになつたなどとお思ひになると、涙で茫とおなりになつた。守刀と一緒に經の箱が載せられた。未だ黑塗の經箱が出來て居ないので假りに故人の螺鈿の手箱をそれに充てたのであつた。箱をお持ちする宮のお姿は浦島の子のやうであつた。一條の邸に車が着いても、宮は自邸の氣がされず、お下りにならうともなさらなかつた。大將は東の對の南の座敷を假りの自分の居間として、主人顏をして居た。三條の家では誰も皆、何時頃から始まつた御關係でせうなどと驚いて居た。多情な戀愛生活を知らない人などはかうした思ひ懸けぬ事を實行して了ふものである。併し世間では以前からあつた關係が今公然に發表された位に思つて居た。宮は未だ精進をして居られたので膳の上などは祝儀らしく無かつた。食事などが終つて一段落がついた時、大將は此方へ來て宮の御寢室へ案内を强ひた。

「今日明日だけはお待ち下さいまし。舊のお邸へお歸りになりますと、又お悲しみも新しくお

起りになつて、生きた方のやうでも無く、泣き寢におやすみになつたのですから。」

と少將は云つた。

「變な事ではないか。聰明な方のやうに想像して居たが、幼稚な所の拔けぬ方と思ふ外は無いではないか。」

宮の爲めにも自分の爲めにも世間の非難を許さぬ用意の十分ある事を、大將は云つた。

「それはさうで御座いませうが、唯今は此のお悲しみでお生命が何うかなりはしないかといふ事だけを私達は御案じ致して居るのですから。」

「聞いた事も見た事もないお取扱ひだ。世間へも何の面目があると思ふ。」

「聞いた事も見た事も無いと申すのは、それは、あなた樣の早まり過ぎた御用意の事では御座いませんか。」

少將は少し笑つた。大將は今は主人として少將を伴つて、凡その見當をつけて宮の御寢室へ入つて行つた。宮は座敷倉の中へ敷物を一つお敷かせになつて、錠を下してお寢みになつて居

た。かうして居られるのもたゞ時間の問題だけであるとお悲しみたなつて居たのである。驚くべき冷酷な宮のお心であると、大將は驚いたが、自分の戀は必ず成功するといふ自信を以て此夜を明かした。溪を距てて寢るといふ山鳥の夫婦のやうな氣がした。漸く明方になつた。かうした扱ひを受ける自分の顏を見られるのが恥しくて、大將は出て行かうとした時、

「たゞ少しだけ戸をお開け下さい。お話したい事がありますから。」

と申上げるのであつたが、何の反應も見えなかつた。大將は六條院へ來て休息をした。花散里夫人は、大やうにたづねた。

「一條の宮樣と結婚なすつたと、前大臣家あたりではお噂して居るやうですが。」

「そんな風に噂もされるでせう。最初に私が申込んだ頃は、御息所は以ての外の事のやうに云つて居ましたが、病氣が愈々惡くなつた頃、自分の死後は宮樣を御後見するやうにと遺言があつたのです。私も初めから宮樣には好意を持つて居りましたから。」

大將は笑つて、

「ところが、御本人は尼になる事ばかりを考へて居るのです。それでも私としては御息所の遺言もありますから形式だけは良人となつて同棲する事にしたのです。朱雀院がお出でになりましたら、お話の序でにこの事を申上げて置いて下さいませんか。」

「私は、人の作り事かと思つて居たのです。世間には澤山ある事ですが、三條の姫君が何うお思ひになるだらうと思ふとお可哀相ですよ。今まであんなに御幸福だつたのですから。」

「姫君などゝ云ふと可憐な人のやうですね。鬼のやうな女が。」

と云つて、又、

「決してあの方もおろそかには致しませんよ。失禮ですが、あなた樣御自身の御境遇から推察なすつて下さい。穩かに誰へも好意を持つて暮すのが、結局勝利を得る道では御座いませんか。此方の南の夫人の態度と云ひ、あなた樣の御善良さと云ひ、女の手本だと思つて居ります。」

と云つた。花散里夫人は笑つた。

「手本だと言はれる程、私は哀れな妻なのですね。それにしても可笑しいのは、院は御自分の多情の癖はお忘れになつたやうに、少し戀愛事件をあなたがお起しになると大變な事のやうにお諭しになつて。」

「さうですよ。親のお言葉が無くても、私は浮氣な事などする男でもありませんのに。」

大將は非常に可笑しいと思ふ風であつた。六條院のお居間へ來た大將を御覽になつても、院は何ともお云ひにならなかつた。男の盛りのやうな大將の美しさを見ると、此度のやうな事件の起るのも當然である、女が此人を愛さずに居られる筈が無いとも、お思ひになつた。畫近く大將は自邸へ歸つた。何人もの同じ位の子供達が直ぐに傍へ纏づて來た。夫人は几帳の中で寢て居た。大將がさり氣無い風をして夫人の顏の上にかゝつた夜着の端を除けると、

「此處を何處だと思つてお出でになつたのです。私はもう死んで了つたのですよ。平生から私の事を鬼だとお云ひになりましたが、眞實の鬼にならうと思つて。」

と夫人は云つた。

「あなたの氣持ちは鬼以上だけれど、顏はそんなに恐くは無いから、私は嫌ひになれないだらう。」

「美しい戀をする人達の間に混つて生きて居られない私です。何んな處へでも行つて了ひます。そんな心の方と長く一所に居た事も後悔して居るのですから。」

起上つた夫人の愛嬌のある顏が赤くなつて一種の魅力を持つて居た。

「子供らしく腹を立てる鬼だから、もう恐しい氣もしない。」

「何をおつしやいます。おとなしく死んでお了ひなさい。私も死にます。いろいろと聲を聞くと嫌になります。あなたを置いて死ねば又何んな事をなさるかと氣懸りだから。」

大將は夫人を笑顏で見ながら、

「私を殺して自分も死なうといふのですか。二人の葬式を一所にして貰ふ約束は、前にしてあつたのだからね。」

などゝ宥めたりした。若々しく單純な性質の夫人であつたから、良人の言葉はいゝ加減なものとは知り乍らも機嫌は直つて行つた。大將の心は一條院へ飛んで居た。餘りに意志の强い女性ではおありにならないが、尼にでもなつて了はれると自分の不名譽にも思はれて、當分は毎夜彼方へ行かねばならないと、慌しい氣がした。昔からあなたの爲めに何れ程苦勞したらう、一つの戀を守り續けたのも、女でも出來ない事だと皆が云ひました、子供も多數ある仲でもあり、何んなに變らぬ愛を持つて居る自分かを長い將來に見て貰ひ度いなどゝ云つて、大將は泣いた。夫人も、昔を思ひ出して、宿緣の深さも思はれるのであつた。袖に香を焚きしめたりして出掛けて行く良人の姿を燈の明りに見て居ると、雲井の雁の夫人は涙が流れた。そして大將が着更へて脫いだ單衣の袖を引寄せて、

「私は黑染めの着物を着る人になつて了はうかしらん。」

と獨言を云つた。それに氣がつくと大將は足を留めて、困つた心ですね、と云つた。一條では未だ宮は座敷倉から出ようともなさらなかつた。せめて平常の御寢所でお寢みになるやうに

と女房達も申上げ、宮も道理と思召すのであつたが、其後の自分の受ける世間の非難などを考へると、又心も變つて此の晩もお逢ひにはならなかつた。

「母君の喪中だけは、外の事を一切思はずに謹慎したい思召しが濃厚なのですが、又一方では知らない者の無い位にあなた樣との事が世間へ知れたのを殘念がつておいでになるのです。」

女房達も大將に同情して居た。

「私の愛は噂などに左右されるやうなものでは無い。」

大將は歎息した。

「實際の事は宮樣の思召しの通りの關係に止めるにしても、暫くは新婚者らしく御一所に居たい。さうかと云つて、私が斷然來なくなつたら宮樣は何ういふ世評をお取りになるだらう。」

大將が氣の毒で見て居られなくなつた少將は、女房達の通つて行く入口にしてある座敷倉の北の戸口から、大將を入れた。ひどい事をする人達だ、女達と云つても誰一人頼みになる者も無い、と宮はお歎きになつた。男が何と申上げても、宮はたゞ恨めしくばかりお思ひになつて

居た。

「あるまじい戀をし初めた自分を、後悔致して居りますが、取返し得るものでも御座いません。思ふ事のかなはない時身を投げる人もあるのですから、私の此の愛情を深い水と思召してそれへ身を捨てるとお思ひになつたらいゝのです。」

とも大將は云つたが、單衣でお體を包むやうにして、宮は聲を出してお泣きになるばかりであつた。何うしてかうであらう、岩や木以上に無情な風をお見せになるのは前生の約束の爲めかなどゝ思ふと、大將は憤りに似た氣持を覺えて、雲井の雁の夫人の事が思はれ、此戀が味氣なくなつた。大將はもう强ひて宮の御機嫌を取らうともせずに歎き明した。こんなみじめな事で出入りするのがきまり惡くて、大將は今日は此方に留つて居る事にした。愈々疎い風をお見せになる宮を恨めしくも又哀れにも思つて居た。

藏の中は、薫物の大箱や厨子棚が脇に寄せてあり、細かな物も多く置いてある譯では無く、感じがよかつた。中は暗い氣がして居たが、朝日が出たらしく光が射して來たので、大將は被

いて居る宮の夜着の端を除けて、亂れた髮を手で撫でつけるやうにして、お顏を少し見た。上品な飽くまで女らしい艶なお顏であつた。男は正しく裝つて居る時よりも一層美しかつた。それ程美しくもなかつた衛門督にさへ愛されなかつた自分が、其頃より一層衰へた今、此人にずつと愛される事は無理であらうと宮はお思ひになつた。大將の手水や朝の粥は宮のお居間の方へ運ばれた。喪の色は成る可く目に付かぬやうに此室の東の方には屏風を立て、中央の室との仕切の所には沈の木の二段の棚などが置かれてあつた。大和守のした事であつた。派手でない山吹色、黑ずんだ紅、深い紫、青鈍などに喪服を着更へた女房達が給仕をした。かうした勢力のある御良人が宮にお出來になつた事を聞いて、昔は勤めて居なかつた家司などが突然現れて來たりした。

其家の主人らしい生活を大將が一條で始めて居る數日間を、三條の夫人は、もう捨てられて了つた樣に思つた。此侮辱に堪へる事も出來ないと思つて、夫人は前大臣家へ方角除けに行くと云つて邸を出て行つた。女御が實家へ歸つて居る時でもあつたから、姉君に會つて惱ましい

氣持ちも少しは紛らす事も出來た雲井の雁夫人は、平常のやうに直ぐには戻らずに、父の家の客となつて居た。此事は直ぐに左大將の耳へ入つた。そんな事が無いかと豫感された烈しい性質の女性でもあつたし、大臣も寛大な所の缺けた性格であつたから、絶交するといふやうな態度を取られる事になつても困ると、大將は驚いて三條へ歸つた。姫君達と幼少な若君だけを伴れて行つて、半分ばかり幼い人達を夫人は殘して居た。手紙を度々遣つて迎への車も出したが、夫人からは返事も無かつた。大將は、大臣への義理もあるので自身で迎へに行つた。夫人は寢殿の方に居るといふ事で、平生行つて使つて居る屋敷の方には女房だけが居た。若君達だけは乳母に添つて此處に居た。

「今更苦々しい態度ではありませんか。可愛い人達を彼方此方へ置き放しにして、自分は寢殿でお姫樣に返つたやうな氣で居るあなたの心持ちが解らない。二人の仲はこんなものでは無いでせう。一寸した事にこだはつて、こんな扱ひを私にしていゝのでせうか。」

大將は取次ぎによつて、夫人を責めた。

「もう總ての事がお氣に入らないものになつて了つたのですから。今更私の性質も直す必要は御座いますまい。子供等だけは愛して頂ければ嬉しく思ひます。」

夫人の返事はこれであつた。大將は、强ひて夫人の出て來る事も求めずに一人で寢た。幼い人達を傍へ寢かした大將は、何んなに女二の宮は煩悶をして居られるかと思ふと苦しかつた。こんな遣瀬ない心痛ばかりをしなければならない戀といふものを、何故人は面白いと思ふのであらうかとも考へた。夜が明けた時、大將は、

「駄目なら駄目と斷念はしますが、今一度だけ、元通りになつて欲しいといふ希望を入れて呉れたら何うです。三條に居る子供等はあなたを戀しがつて居ましたが、選り殘して來たあなたにはあなたの考へがあるのでせうから、私の手で何うにか育てゝ行ます。」

と威嚇的な事を言つてやつた。一本氣な良人の性質を思ふと、夫人は不安になつた。

「姫君も邸の方へ歸して貰ひます。顏を見に一々此方へ來ては居られませんから。」

とも又大將は言つた。可愛い姫君達が父の大將の居る室へ伴れられて來た。

「お母様の云ふ通りになつては不可ませんよ。ものゝ判斷の出來ない女になつては不可ませんからね。」

と、大將は優しく教へて居た。前大臣は娘と壻の此の事件を聞いて外聞惡く思つた。

「暫くは靜觀して居るべきであつた。婦人が反抗的に家を出るのは、早まつたことゝ見られて却つて人の同情を失つて了ふ。併し今になつては、直ぐに負けて出るのは不可ん。」

と舅の大臣は言つた。そして一條の宮へ藏人の少將を使として手紙を送つた。

契り有れや君を心に留め置きて哀れと思ふ恨めしと聞く

「無關心にはなれない因緣があるので御座いますね。」

少將はずんずん宮邸へ入つて行つた。南の緣に敷物を出したが女房は出るのを辛く思つた。況して宮は佗しいお氣持ちであつた。少將は邸の中を見廻し乍らも、亡兄を偲ぶ樣子であつた。何うしても返事は書けないとお言ひになる宮であつたが、女房達は、自分達が代つて御挨拶をしてよい方で無いのだから、と言つて促した母。君が生きて居たら、何んなに自分の今日

の事を不愉快に思つても、身に代へて自分の罪は隱して呉れるであらうにと、母君の大きな愛を思ひ出しながら、宮がお書きになる紙の上には、墨よりも涙が多く傳つて、字が續かなかつた。

此度の噂を開いた藤典侍は、自分を許し難いものとして憎んで居る夫人にとつて今度こそ侮り難い相手の出現ではないかと思つて、時々手紙などを送つて夫人を慰めて居た。失敬なと云ふ氣持ちも夫人にはあつたが、ものゝ身に沁む頃の退屈さの中に、此手紙に哀れが誘はれないでもなかつた。夫人との結婚の前の失戀時代には此典侍だけを愛人として慰められて居た大將であつたが、其後は通つて行く事も偶さかになつて居た。夫人からは長男、三男、四男、六男と長女、二女、四女、五女が產れ、典侍は三女、六女、二男、五男を擧げて居た。典侍に生れた男の子は顏もよく才もあつて優れて居た。三女と二男は六條院の花散里夫人が引取つて育てて居た。

御法

あの大病以後、紫夫人の健康は勝れなかつた。何處が惡いと云ふのでは無かつたが、始終患つて居た。それが一年餘りも續いた今は目に立つて弱々しい姿になつたので、院は非常に心痛をしておいでになつた。此人の死後のこの世は、暫くでも、悲しい事であらうと院はお思ひになつて居た。紫夫人自身も、人生の幸福には不足もなく、氣懸りになる子も無いので、何うしても生きて居たい生命とは思はれなかつたが、たゞ、濃かに思ひ合つて來た自分が缺けたら院が何んなに不幸なお氣持ちにならうかと思ふ點で、心の中に歎かれるのであつた。

今後暫くでも、命のある間は佛勤めを十分にしたいと始終夫人は六條院へ願ふのであつたが、御同意が無かつた。院も、御自身夫人と一所に出家を斷行しようかといふお心も無いのでは無かつたが、一旦佛道に入つた以上は假りにも此世を顧る事はしたくは無い、未來の世では一つ蓮華の上に安住しようと約束した夫婦ではあるが、此世での出家の後の生活は全く別なものにしなければならない、病弱な夫人を離れて了つては氣懸りで悟道に入つた新生活も內から破れる事になりはしないかと、恐れておいでになるのであつた。院の御意志を知らぬ顏をして

出家して了ふのも如何か、その點で夫人は院を怨めしくも思つた。それも自分の前生の罪障の深い爲めかと不安にも思つた。

紫夫人が以前から自身の願はたしの爲めに書かれて居た千部の法華經を佛の前に披露する法事を、此の際自邸のやうな氣のする二條の院で催す事になつた。僧への纏頭の法服なども、殊に選んで夫人は作らした。夕霧の大將は音樂と舞樂の方を受持つて世話をして居た。宮中、東宮、院の后の宮、中宮を初め諸方から誦經の寄進や捧物も多く、華麗な式場が現出した。何時の間に此大部の經卷を夫人は用意したのかと參列者は皆驚いた。花散里、明石の夫人なども來會した。紫夫人は南と東の戸を開けて聽聞の席にした。北側の部屋が各夫人の席であつた。

三月の十日の櫻の眞盛りであつた。麗かに暖くて、佛の世界に近い氣もして、佛緣の無い者にも信仰に入る機緣が得られ相であつた。同音に僧達の唱へる聲に、況して弱い紫夫人の心は堪らなく寂しかつた。夫人は、三の宮に持たせて、

惜しからぬ此身ながらも限りとて薪盡きなん事の悲しさ

といふ歌を明石夫人へ遣した。その返事は、女王の心細さに共鳴した風のものを送つては認識の不足を人に嘲はれる事であらうと、わざと其れには觸れて無かつた。

薪伐る思ひは今日を初めにて此世に願ふ法ぞ遙けき

經聲と樂音が面白く混つて、夜が明けて行つた。朝ぼらけの靄の間には種々の花の木が、絢爛の美を爭つて居て、尙ほ女王の心を春に惹かうとして居た。小鳥も囀つて居た。「陵王」が舞はれて、末の急な調が華かになつた時、殿上の貴紳達が舞人へ脫いで與へた衣服の色が美しかつた。親王方、高官等も嗜みのある者は藝を惜しまず其場で見せて遊んだ。此の歡樂を見ても餘命の少い事を知つて居る紫夫人の心だけは悲しかつた。昨日は特別に早く起きた所爲か、苦しくて夫人は横になつて居つた。笛の音などもこれが聞き納めか、集つて居る人達の顏を見るのも此れが最後かと思ふと、懷しく、夫人はぢつと見入るのであつた。

況して、四季の遊びなどにも競爭心は必ず有つても流石に長く培はれた友情といふものもあつた夫人達に對しては、誰も永久に殘る人は無いのではあるが、先づ自分一人が此の中から消

えて行くのかと思はれるのが、女王の心に悲しかつた。宴樂が終つて、それぞれの夫人が退つて行く時、永久の別れの心持ちがして、女王は泣いた。花散里夫人の所へ、

絶えぬべき御法ながらも頼まるゝ世々にと結ぶ中の契りを

と、女王は書いた。供養の法會に續いて、不斷の讀經懺法なども、此方で院はおさせになつて居た。祈禱も始終おさせになつた。

夏になつた。暑氣の爲めに女王は死ぬやうになる事が多かつた。病名も定められぬ程度のものであつたが、衰弱が酷かつた。女房達の心には不安が生じて來た。人々も歎くばかりであつた。

院は中宮を二條の院へ退出おさせになつた。中宮は當分東の對にお住みになる筈であつたから、一旦此西の對にお入りになる事になつて、お迎への式なども定例通りにした。さうし乍らも、益々榮える此宮の未來の日を見ずに終るのかと、女王は悲しんだ。供の人達の名が披露された時、誰が居る、誰れが來て居ると、一々女王は耳に留めて居た。久し振りの二人の女性は

しめやかに語り合つて居た時、六條院が入つてお出でになつた。

「今夜は巣を追はれた鳥のやうに可哀想な私です。何處かで寢る事にしよう。」

と、院は他の室へ行かれた。起きて居る女王の姿を御覽になつたので嬉しくもお思ひになつたが、それを強ひて病氣がよい樣に見て御自身を慰めるのであつた。

「離れた所では、彼方へ歩いてお歸りになるのは大變ですし、私も、彼方へは上れませんから。」

と、女王は中宮を暫く病室のある方の對へお留めして居た。明石夫人も此方へ來た。

中宮に御遺言して置きたいと思ふ事もいくつか女王にはあつたが、賢さうに死後の事を今から言ふやうにとられるのも憚かられて、さうした問題には觸れなかつた。唯外の話のやうにして人生のはかなさなどを言葉少なに語るのが、中宮の心には心細かつた。孫の宮達を見て、

「あなた方が何うおなりになるだらうと、將來を見度い氣がしますのも、知らず知らずの中に生命が惜しまれるのでせうね。」

などゝ涙ぐむ女王の顏は非常に美しかつた。中宮もお泣きになつた。女王は、それと無しに話の中で時々女達の中の誰彼の名を言つて、自分が死んだ後は、あなたから氣をつけてやつて欲しいと言つて居た。

病室で祈禱の始められる日になつて、中宮は東の對へお歸りになつた。幾人もの宮樣方の中で殊に愛らしい姿の三の宮を傍で遊ばせ乍ら、紫の女王は、女房などの聞いて居ない折を見て言つた。

「私が亡くなつた後でも、あなたは思ひ出して下すつて。何う。」

「いらつしやらなくなつたら、私は悲しいから厭。御所の陛下よりも中宮樣よりも、お祖母樣が好きなのだから。」

目を擦つて涙を紛らす其のお姿を、女王は微笑して見て居たが、眼からは涙が零れた。

「大人になつたら、此處へお住みなさいね。前の紅梅と櫻は、花の頃にはよく可愛がつてお眺めになるのよ。時々は佛樣へもお供へして頂戴。」

三の宮はうなづき乍ら夫人の顏を見守つて居たが、涙が落ち相になつたので立たれた。手許でお育てしたのであるから、此宮と女一の宮にお別れになるのが殊に夫人には悲しかつた。

漸く秋が來て、京の中も涼しくなつた。夫人の病氣も少し快くなつたやうには見えたが、何うかすると容態は元に戻つた。未だ身に沁むほどの秋風は吹くのでも無かつたが、濕つぽい氣持ちで夫人は日を送つて居た。夫人は中宮に今少し此處においでになつて貰ひたかつたがそれも口には出せなかつた。御所から頻りに歸るやうにと御催促の來て居る事も知つてゐた。中宮は、こちらから宮中へ入るそれまでは母の傍に居たいと言ふので、西の對へお席を設けて懷しい中宮を夫人は迎へた。酷く疲せて了つた夫人は、却つて上品で最も美しい姿にも思はれた。これまでは、餘りに華かに艶であつた盛りの時に却つて花に比べても見られたものであるが、今日は限りも無い美が備つて居た。

風が凄く吹く夕方、前の庭を眺めようと夫人は起きて脇息に凭れて居た。院が來られて、

「起きて居られますね。中宮がおいでになる時だけ、氣分が晴やかになるやうですね。」

と喜ぶのは、夫人には心苦しかつた。此の命が愈々終つた時、何んなにお悲しみになる事であらうと思ふと胸が塞るやうであつた。

美貌の二女性が一室に會つて居る、此儘かうして千年を過す法は無いものかと院はお思ひにもなつた。

「もう彼方へお出でなさいな。私は氣分が惡くなつて參りました。病氣中ではあつても、これでは餘りに失禮ですから。」

夫人は、さう中宮に云つて、几帳を引寄せて横になつた。不安になつた中宮は夫人の手をお取りになつて泣く泣く見て居たが、露の消えて行くやうに終りが近づいて來たのが判つた。誦經の使が寺々へ數知れず立てられ、院内は騷ぎ立つた。此前に物怪(もの)の例もあつたので、院は樣樣の事をお試みになつたが甲斐が無かつた。翌朝の未明に全く夫人の息は絶えた。

臨終に會つた事を、中宮は嬉しくも悲しくも思召した。院の内は心を取亂した人ばかりになつた。院はお心を靜めやうも無いやうに、夕霧の大將を几帳の傍へお呼びになつた。

「もう駄目だ。長い間希望して居た出家の事を此の際遂げさせてやらないのが殘酷なやうだ。加持の僧達は少し殘つて居ないかしら。冥土のお手引きを佛にお願ひして、髪を切つて尼にする事を誰かにさせて呉れ。」

落付かう落付かうとされるのであるが、お顏色も變つて、涙が止らなかつた。御道理の事であると大將は悲しかつた。

「物怪などが周圍の者を悲しませる爲めに、さうした事をする事もありますが、併し只今の御處置は結構な事で御座いますし、一日一夜でも道にお入りになつただけの事は報ひられませうが、もう全くお亡りになつて髪の形を變へますだけでは、あの世の光にはなりますまい。見て居る者の悲しみだけが增す事でも御座いますから、如何と私には思はれますが。」

大將は、忌中を此家に籠り續けようとする志のある僧達の中から選んで念佛を命じたり、總て此人が奔走した。今日まで大それた戀を抱くといふのでもなかつたが、あの野分の夕の隙見位にでも又あの美しい繼母が何時見られよう、聲さへも自分は聞かれぬ運命に終るのかしら、

といふ憧憬だけは常に大將の念頭から去らなかつたのであるから、聲だけはもう永遠に聞けなくなつて了つた、遺骸の顏も此時以外に見る機會といふものは無いのだと思ふと、聲を立てゝ泣いた。泣き騷いで居る女房達を、少し靜かに、と制するやうに見せて物を言ふ間に、大將は几帳の垂れ絹を引上げて見た。未だほのぼのとし初めたばかりの夜明けの光であつたから灯を近く寄せて窺ふと、女王の顏は更に美しかつた。大將が覗いて居ても隱さうとする生前の心はもう殘つて居なかつた。大將は涙で眼も見えなくなつた。强ひて眼を瞠らうとしたが却つて悲みが增して、自分も氣を失ふのではないかと思つた。夫人の髪はゆるやかに清く美しかつた。明るい火にも顏をそむけず寢て居る魅力が大きかつた。見れば見る程故人の美の完全である事が認識されて、自分の心を離れて了ふやうな氣のする魂は、其儘此遺骸に留るのではないかと云ふ氣もした。

六條院は悲しみを抑へて、遺骸の始末など、指圖を遊ばして居た。昔も戀人や妻の死の御經驗が無いのではなかつたが、未だこんな事まで手づから世話をなすつた事はなかつた。御自身

としては前にも後にも無い程の悲しみであると見ておいでになつた。遺骸は其日の中に納棺された。遙々と廣い鳥邊野も隙も無い程に人が集つた嚴かな葬儀であつたが、送られた人は果敢ない煙になつて立ち上つて了つた。空を歩いてゐる樣なお氣持で人に扶けられ乍ら足を運ぶ六條院を拜しては、あの高貴な御身分で、と誰も皆泣いた。遺骸のお供をして來た女房達は、夢の中を彷徨ふやうな氣持で、車から轉び落ちさうにも見えるので從者達は扱ひ兼ねて居た。昔大將の母君の葵夫人の葬送をした夜明けの事を院はお思ひ出しになつたが、其時はなほ月の形がはつきりと見えたお記憶があつた。今は心も月も暗闇の中のやうな氣が遊ばされるばかりであつた。十五日の夜明けであつた。女王は十四日にお亡りになつたのである。

華かな日が上つて、野原一面におきわたした露がきらきらとして居た。其の路々、院には一層人生といふものが厭はしく悲しく思召された。

大將は、故人の忌中は二條の院に籠る事にして、明け暮れ院のお傍に居た。野分めいた風の吹く夕方、大將は昔の事を思ひ出して、仄かにだけしかあの姿を見る事は出來なかつたのであ

るが過ぎ去つた秋の夕が戀しかつた。人目に怪しまれまいと、涙を紛らす爲めに、南無阿彌陀佛と唱へ乍ら、大將は涙の珠も混ぜて珠數を繰つて居た。忌中の定つた念佛の外に、院は法華經もお讀ませになつて居た。

鏡に映る容貌を始めとして、惠まれた人物として此世に登場した事はたしかであるが、幼年時代から既に人生の無常を悟らされるやうな事が次々と起り、これによつて佛道へ入れといふ佛の御催促があつたのも、素知らぬ顏をして居たので、此大きな悲しみを體驗しなければならない事になつたのであらう、これ程悲しみの靜め難い心を持つてゐる間は佛の道にも入れまい、此の心を少し緩かにして頂きたいと、六條院は阿彌陀佛を念じ續けた。宮中を始め、方々から形式的でなく度々御見舞の使ひが六條院へ遣された。前太政太臣は、人の不幸を傍觀出來ない性質であつたから、紫夫人といふ不世出の佳人の死を惜しんで度々見舞ひの手紙を院へ送つた。昔、妹の葵夫人が亡なつたのも此頃であつたと、大臣の心には當時の悲しみが又湧いて來た。あの時悲しんで呉れた人々も多くは既に故人になつて居る、先だつといふ事も後れるとい

ふ事も大した差の無い事ではないかと考へた大臣は、雲の動きも身に沁みた夕方、慰めの手紙を子息の藏人の少將に持たして六條院へ遣つた。長い文章の書かれてある端の方に、

古の秋さへ今の心地して濡れにし袖に露ぞ置き添ふ

とあつた。院も、丁度過去を偲んで居た時であつたから、昔の秋に早く死別れた妻の事も皆一つの戀しさになつて流れる涙の中に返事をお書きになつた。

露けさは昔今とも思ほへず大方秋の世こそつらけれ

度々の厚意のある御慰問の御禮の言葉を添へる事も院はお忘れにならなかつた。院は、其秋のうす墨色よりも少し濃い色を今は着ておいでになつた。

何んなに幸運に惠まれて居る人でも、理由の無い世間の嫉妬を受ける事もあり、又自身の驕慢から人を苦しめる事もあるのであつたが、紫の女王といふ人には、不思議にそれが無かつた。故人を知らない人までが、今年の秋は風の音にも蟲の聲にも、又と得難いこの世の寶を失つた悲しみを誘はれて涙を落すのであつた。ましてや少しでも女王を見て居る人達には、その悲

しみは忘れられるものではなかつた。使はれて居た女房達には尼になる者もあつた。冷泉院の后の宮も同情のあるお手紙を始終院にお寄せになつた。

枯れはつる野邊を憂しとや亡き人の秋に心を留めざりけん

「初めて解つた氣も致します。」

かう書かれたものを、院はお悲しみの中でも繰返しお讀みになつて居た。高雅な趣味を知つた女の友として、未だお一人はあると嬉しく思ひながらも涙は零れ續けた。

院に代つて、夕霧の大將は法事などの仕度をして居た。自分の生命は今日が終りになるのではないかとお考へになる日も多かつたが、結局四十九日の忌みの明けるのを御覽になる事になつたのを、院は夢のやうに思召した。中宮も故人をお忘れになる時が無かつた。

四

春の光を御覽になつても六條院の暗いお心が改るものでなかつた。表へ新年の賀を申す人達が續いて參入するが、病氣のやうに見せて、ずつと御簾の中にばかりおいでになつた。兵部卿の宮がお出でになつた時にだけはお居間の方でお會ひにならうとした。先づ、

我宿は花もてはやす人も無し何にか春の訪ね來つらん

この歌を取次がせた。紅梅の木の下を通つて對の方へ歩いてお出でになる宮を御覽になつても、此人以外に紅梅の美に比べてよい人ももう存在しないと院はお思ひになつた。仄かに開いた花は美しい紅を見せて居た。

女房なども長く紫夫人に仕へた者は未だ喪服の濃い色を改めずに居た。他の夫人達の所へ行かれる事もなく、院が常に此方にばかり暮して居る事だけを慰めにして居る人達であつた。これまで執心がおありになるのでもなく時々情人らしくお扱ひになつた人達に對しては、獨居を遊ばすやうになつてからは却つて冷淡になり、夜は幾人も寢室へ侍らして、故人の話などを遊ばす時もあつた。次第に戀愛などから超越して了はれた院は、未だかうした純粹なお心になれなかつた時代に怨めし相な樣子が折々夫人に見えた事などをお思出しになつた。戯れにもせよ、運命が然らしめたにせよ、何故さうした誘惑に勝てずに、あの人を苦しめたのであらう、飽くまでも怨み通すといふ事は無かつたが、何の人と交渉の生じた場合にも一度づゝは何うなる事かと不安におびえた風が見えた、とお思ひになると、悔いられて堪らなかつた。其頃を見て居て今も殘つて居る女房などは、少しづつ當時の樣子を話し出しもした。

入道の宮が六條院へ御入嫁になつた時には何等色には出さなかつた夫人ではあつたが、何かの事に觸れて味氣ない日が來たと心に思ふ風情の見えたのが哀れであつた、中にも雪の降つた夜明けに戸の開けられる迄を待つ間自身の心も冷え切るやうに思はれ、烈しい荒模樣の空も自分を悲しくしたのであつたが、入つて行くと和かな氣分を見せて迎へ乍らも袖は酷く涙で濡れて居たのを隱すやうにして居た夫人を、院は夜通し思ひ續けて居た。夢にでも會へようか、何んな世に又めぐり逢ふ事が出來るのであらうと思ひ續けるばかりであつた。

「まあ、隨分な雪。」

夜明けに部屋へ下つてゆく女房であらう、外で云つた聲を聞くと、昔の雪の夜明けのまゝのやうなお氣がしたが、閨には紫夫人は居なかつた。寂しさを紛らさうと直ぐにお起きになつた院は手水をお使ひになつた。女房達は、埋めてあつた火を起して火鉢をお傍へ持つて來た。中納言の君、中將の君などがお居間に來てお話の相手をした。

「獨り寢が何とも云へず寂しく思はれる夜であつた。それでも、かうした坊樣らしい生活もやつて行ける自分だ。今迄の事を考へると莫迦莫迦しくなる。」

と院はお言ひになつた。自分までが此處を捨てたら此の人達は何んなに憂欝になるであらうなどゝ居間の中を見廻して、院は目立たぬやうに佛勤めを遊ばして經をお讀みになつた。

院は、歎き明かした朝や、物思ひに一日を暮して了つた夕方などは、故人が愛して居た人達を集めて語り合ふのを慰めとして居られた。中將の君といふ女房は未だ小さい時から紫夫人に仕へて來た人であつた。何時となく院は情人として了つたのであつたが、女は夫人に對して濟まないと思つて院を避けてばかり居たのであつた。夫人の歿後は、愛欲を離れて、たゞ誰よりも

故人の愛して居た女房であつたと思つて院は此人を懐しく思つておいでになつた。喪服姿も可憐な女であつた。

高官達とか御兄弟の宮方とかは始終お訪ねして來たが、院は餘り御會ひにならなかつた。悲しみに浸りつゞけて呆けた自分が何んな醜態を客に見せないとも限らない、さうした事を後々まで語り傳へられるのは厭だとお思ひになるのであつた。夕霧の大將にも御簾越しにしかお逢ひにならなかつた。夫人達の所へも稀にはお出でになつても、其處でも其の人々が紫の女王で無い悲しさがお心に湧いて涙ばかりが流れるのであつたから、何處へもお出かけになる事はなくなつて居た。中宮は御所へお入れになつたので、三の宮だけは寂しさの慰めに、六條院へ留めてお置きになつた。

「お祖母樣が仰やつたから。」

と云つて、宮は對の前の紅梅と櫻を自分の責任のやうに見廻つて居るのがいぢらしかつた。

二月になつて、花の木の梢は皆霞んで見える中に、女王の形見の紅梅には鶯が華かに鳴いて居

た。春が深くなつて行つた。遠い、鳥の聲もせぬ山奥へ入り度い、と院はお思ひになるのであつた。山吹の咲き誇つた盛りの花も、涙のやうに露に濡れた所ばかりが目につくのであつた。一重櫻が散り八重櫻の盛りが過ぎて樺櫻が咲き初め、その後は藤といふ他所と異つて、故人が巧みに木を配した此園では、何時までも光る春が留つて居るやうであつた。

「私の櫻がとうとう咲いた。何時までも散らし度くないな。木の周りに、几帳を立てゝ布を垂らして置いたら何うだらう。」

若宮は大した發明をしたやうに言つておいでになつた。院も微笑を遊ばした。

「覆ふばかりの袖を欲しがつた歌人よりも、宮の考への方が合理的だね。」

此若宮だけを相手に、院はお暮らしになつて居た。

「あなたとかうして居るのも、もう長くはありませんよ。私の生命は未だあつても、絶對に逢ひ出來なくなるのですよ。」

と涙ぐんで院はお言ひになつた。

「お祖母様が仰つたのと同じやうな事を何故仰やるのです、不吉ですよ、お祖父様。」

顔を伏せて袖を弄り乍ら、若宮は涙をお隱しになつて居た。欄干の角のところに凭れて、院は庭や御簾の中を眺めておいでになつた。女房などは未だ喪服を着て居るのがあつた。さうで無いのも、派手の色は避けて居た。院の直衣も色こそ普通であつたが、態とじみな無地であつた。座敷の裝飾なども簡素で、見た眼に寂しかつた。

六條院は入道の宮の御殿へお出でになつた。若宮も人に抱かれてお供をして、此方の若宮と一所に走り廻つて、花の木を傷ける事も構はずにお遊びになつて居た。尼宮は佛前で經をお讀みになつて居た。何程の信仰があつて入道した譯でも無かつたが、專念に佛に仕へて居られる今の尼振りは、院には羨しかつた。閼伽棚に置かれた櫻の花に美しく夕日の照つて居るのを院は御覽になつて、

「春が好きだつた人が亡くなつてからは、庭の櫻も情無いやうにばかり見えるのですが、かうして佛にお供へしてあるのは好もしいと思ひますよ。」

とお云ひになつた。

「對の前の山吹は花の房も大きく見事ですよ。植ゑた人が居ない春だとも知らずに。」

「花が咲いても散つても、此方は氣にならない境遇ですわ。」

尼宮はかうお答へになつた。自分の悲しみを嘲笑するやうな言ひ方ではないかと院はお思ひになり乍らも、紫の女王にはかうした事は無かつたと、お考へになつて居た。あの時はかう、あの時にはかうと、才氣と貴女らしい匂の多かつた性格、樣子、言葉などばかりが偲ばれた。

夕霞がものを朧ろに見せる美しい時間であつたから、院は明石夫人の方に廻つておたづねになつた。久し振りであつたから、突然なのに明石夫人は驚いたが、素早く席を設けたりしてお迎へした所などに此人の怜悧な性質が見えるのであつた。併し、故人はかうでもなかつた、重みのある氣高さがあつたと思ひ比べられて、其幻ばかりが院には追はれるのであつた。何うすれば慰む自身の心であらうかと、苦しく思召した。

「人を餘りに愛する事は、結果のよく無い事だと私は昔から知つて居たし、又其他の事にも執

着心が此世に殘らぬやうにと心掛けて居て、一時逆境に置かれた頃などは、それも仕方の無い事と思つて何處の野山の涯で命を終らうと惜しくは無いと思はれたが、年をとつて死期が近づいた頃になつて種々の係累なども殖えたゝめ、今日までも出家の望みも遂げられずに居るのが自分でも齒痒くてならない。」

かう、院は、紫夫人との死別の爲めばかりの悲しみでは無いやうに云つては居られたが、明石夫人には院の眞實のお心がよく分つて居た。お傷はしいと思つた。

「他から見まして此の世に未練の殘る譯も無いやうな人でも、其人自身には捨てられぬ絆があるのですから、まして院樣などはさう樂々と遁世の道をお取りになれる道理が御座いません。さうお急ぎにならずにおいでになる方が、後で御立派な悟りをお得になる道かと思はれます。今暫く御發心はお延ばしになつて、宮樣方も大人におなりになつて不安も一切無い頃までは此儘でおいで頂けたらと存じますが。」

などゝ眞面目に言ふ明石夫人が、院には好もしく思召された。院は、

「そんなになる迄待つのが思慮深いのであつたら、それよりも、淺薄な方がましなやうだが。」

とお云ひになつた。

「昔中宮がお亡りになつた春は、櫻の咲いたのを見ても實際自分は「心あらば」と、黑く咲いて欲しく思つたものです。立派な方である事が、小さい頃から心に沁み込んで居た爲めに、自分は誰よりも增して悲しかつたのです。戀愛の深さ淺さと故人を惜しむ情とは別なものだと思ふ。紫の女王は、少女時代から自分が育てゝ來た人で、今になつて自分一人だけが取殘されて了つた譯だから憐れまれもし、悲しまれもするのでせう。」

夜が更けるまで院はお話しになつて居た。此儘明石の夫人の處で泊つて行つてもよいとお思ひにはなり乍ら、院はお歸りになつた。御自身でも、不思議に變つたものだとお思ひになつた。明石夫人は寂しかつたらう。

翌朝早く院は明石夫人へ手紙をお送りになつた。

泣く泣くも歸りにしかな假の世は何處も終の常世ならぬに

院の昨夜のお仕打ちは恨めしかつたが、明石夫人はこれを讀むと涙が零れた。

雁が居し苗代水の絶しより映りし花の影をだに見ず

と返事を書いた明石の字は美しかつた。

加茂の祭の日が來た。六條院は、加茂の社前の光景を目に描いておいでになつた。

「女房達は寂しい事だらう、實家の方へ行つて、そこから見物したら何う。」

ともお言ひになつた。院は中將の君が東の座敷の方でうたゝねをして居る傍へお寄りになつた。中將の君は起き上つた。赤くなつて居る顏を恥ぢて隱して居るが、少し癖づいた髪の橫に見えるのが華かに見えた。紅の黃勝ちの袴を穿き、單衣は萱草色で、濃い鈍色に黑を重ねた喪服に、脫いで居た裳や唐衣を俄かに引掛けて居た。橫に葵の葉が置いてあつたのを、院は手に取つた。

「何といふ草だつたらうね、名も忘れて了つた。」

さもこそは寄方の水にみ草ゐめ今日の挿頭よ名さへ忘るゝ

女は恥ぢらひ乍らさうお答へした。さうだつた、と院は哀れに思召した。

大方は思ひ捨てゝし世なれども葵は猶や摘みをかすべき

此人にだけは院も聖人ではおありになれなかつた。

五月雨の薄暗い世界の中では、物思ひを續けておいでになる院も寂しかつたが、十幾日かの月がふと雲の間に現れた珍らしい夜、夕霧の大將が御前に來て居た。花橘の木が月光に鮮かに見えて、匂ひが風と共に折々入つて來た。ほとゝぎすが鳴けばと待つて居る中に、雲が俄に湧いて烈しい雨が降り出し、燈籠の灯が風に消されて了つた。

「私だけの經驗してゐるものでも無いが、獨りの生活といふものは怪しい程寂しいものだ。山へ入つて了ふ前にかうして習慣をつけて置くのは惡くないだらう。」

などゝ院はお言ひになつた。

「女房達、此處へ菓子でも出したら。男達に命じる程の事でも無いから。」

空をお眺めになる寂しい院の御表情を、大將は見た。何時までもこんな風に悲しみがお忘れ

になれないでは、出家を遊ばしても透徹した信仰にお入りになる事は難しくは無いかと思つた。仄かに隙見した面影でさへ忘れられないのであるから、まして、とも思つた。

「昨日今日のやうに思つて居りましたが、もう一周忌も近くなりました。御法事は何んな風に遊ばすおつもりで御座いますか。」

「普通と變つた事を別にしようとも思つて居ない。女王が作らせた儘になつて居る極樂の曼陀羅を、其時に供養したらと思つて居る。」

「御自身の御法要の事までも御仕度遊ばしてお薨れになつたのですね。せめて形見になる人をお殘し下さいましたらと、殘念で御座います。」

「今生きて居る夫人達にも子は少いのだからね。私自身が、子は少ししか持てない運命なのだらう。あなたに子孫を殖して貰ふのだね。」

悲しみを引出す事を恐れて、院は故人の事も餘りお話しにならなかつた。ほとゝぎすが鳴いた。

亡き人を忍ぶる宵の村雨に濡れてや來つる山郭公

と院は言はれた。大將も歌つた。

郭公君についてなん古里の花橘は今ぞ盛りと

大將は今夜は此處に泊る事にした。時々大將はかうして泊つて、院をお慰めするのであつた。女王が居た頃は近くへも容易には寄れなかつた帳臺の傍に居る自分を思つて、大將は、昔が今にならぬのを悲しんだ。

暑い頃は院は涼しい水亭に出ておいでになつた。池には蓮の花が盛りであつた。此花の前にも、院は虚ろなお氣持ばかりがした。日の暮れに近くなると、華かな蜩の聲を聞き乍ら、撫子が夕映えの空の光を美しく受けて居る庭を一人でお眺めになるのも味氣なかつた。螢が多く飛び交つても、お口誦みになるのは「夕殿に螢飛んで」といふ楊貴妃に別れた玄宗の悲しみを述べる詩であつた。七夕も例年のやうでなかつた。院には、星合の空を眺めに出る女房も無かつた。

秋風らしい風が吹き初める頃から、院は法事の仕度でお悲しみも紛れて居た。あれからもう一年經つたのかとお思ひになると、茫然とおなりになつた。正日の十四日には六條院内の人々は皆精進をして、曼陀羅の供養が行はれた。例の宵の佛前のお勤めの爲めに手水を差上げる役に當つた中將の君の扇には、

君戀ふる涙はきはも無きものを今日をば何の果てと言ふらん

と書かれてあつた。

秋が深くなつて行つた。菊にも、雁にも、院は悲しみをお誘はれになるだけであつた。五節などに世の中は華かに明るくなる頃、大將の子息達が殿上づとめに始めて出たと云つて六條院へ來た。母方の叔父の頭の中將や藏人の少將が青摺りの小忌衣の姿で付添つて居た。若い人達を御覽になると、院は御自身の青春の日も偲ばれて、舞姫の一人に心を惹かれた事もあつたなどゝ懷しかつた。

今年をかうして忍んでお過しになつたのであるから、もう次の春には出家も出來ようと其御

用意を少しづゝお始めになつた。院の内の者にもそれぞれ物をお遺りになつた。今日までの生活に區切りをつける爲めといふ御樣子もお見せにはならないのであるが、院のお心は近く仕へる人々には分つて居たので心細く思つて居た。女からの手紙で、惜しく思召して破らずにお置きになつたのも、改めて始末をお始めになつた。須磨の幽居時代に方々から送られたものもあつた中に紫の女王のだけは別に一束になつて居た。御自身がしてお置きになつたのであるが、古い昔の事のやうにお思ひになり乍らも、開いて御覽になると今書かれたやうな夫人の字であつた。永久に形見としようとお思ひにもなつたが、かう云ふものは見る事の出來ない明日の御身の上にお氣がついて、親しい女房の二三人を呼んでお破らせになつた。涙が昔の墨の跡に添つて流れるのが恥しくて、院は、手紙を前へ押しやつて、

死出の山越えにし人を慕ふとて跡を見つつも猶惑ふかな

とお言ひになつた。女房達も詳しく讀むのも遠慮されたが、端々の文字から悲しくなつた。同じ世に居て、近い所に別れ別れになつて居る時に書かれたものでさへも、これであるから、

今の悲しみも道理だ、こんなに女々しく歎かれる自分が恥しい、と院はお思ひになり乍ら、よくもお讀みにならずに、手紙の横に、

かきつめて見るもかひ無し藻鹽草同じ雲井の烟ともなれ

とお書きになり、それを皆お燒かせになつた。

佛名の僧を迎へる行事も今年かぎりの事かとお思ひになると錫杖の音も身に沁みてお聞きになつた。院の爲めに行末長く壽命の續く事を唱へて僧達の祈るのにも、院のお心の中は佛に恥しくお思ひになつた。雪が大降りに降つて厚く積つた。歸らうとする導師にも常よりも手厚くおねぎらひになつた。長年院へ御出入りして居る僧の今は頭の色も變つて來て居る老いた姿も、院は哀れに御覽になつて居た。此日は宮方や高官達も多數參入した。少し花を付けた梅の枝が雪の中に美しく見える日であつたから、音樂の遊びもあつていゝのではあつたが、院には管絃の音も咽び泣きの聲をも立てるものゝやうに思召されるのであつたからたゞ詩歌を歌はせてお聞きになる位にお止めになつた。昔光源氏でおありになつた頃よりも更に光彩の添つた六條院

のお顔を仰ぐ老僧は涙が止まらなかつた。院は、

「鬼やらひをするのに何を投げさせたら一番高い音がするだらう。」

などゝ馳け廻つておいでになる若宮を御覽になつても、此可愛い人をも見られぬ生活に入るのであると思はれるのがお寂しかつた。

物思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や盡きぬる

とお詠みになつた。元日の參賀の客の爲めには殊に華かな仕度をさせておいでになつた。親王方や大臣達へのお贈物なども極めて立派なものを御用意になつて居た。

雲隱

この卷、名のみありて詞無し。

昭和十二年二月三日印刷
昭和十二年二月六日發行

現代語譯國文學全集第五卷
源氏物語　中

定價壹圓八拾錢

著作者　與謝野晶子

發行者　加藤雄策
東京市小石川區表町一〇九

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町一〇八

發兌　非凡閣
東京市小石川區表町一〇九
振替東京三六三三九
電話小石川六六一〇

共同印刷株式會社印刷

第四回配本

印　檢

現代語譯國文學全集

全二十六卷　定價壹圓八拾錢

1	古事記・日本書紀抄	植木直一郎	14	平家物語	菊池寛								
2	伊勢物語・落窪物語	窪田空穂	15	源平盛衰記	白井喬二								
3	竹取物語他二篇	川端康成	16	太平記	西村眞次								
4	源氏物語上	窪田空穂	17	增鏡	岡一男								
5	源氏物語中	與謝野晶子	18	義經記・曾我物語	漆山又四郎								
6	源氏物語下	窪田空穂	19	徒然草・方丈記	佐藤春夫								
7	枕草子	玉井幸助	20	西鶴名作集上	石割松太郎								
8	土佐日記外二篇	藤村作	21	西鶴名作集下	武田麟太郎								
9	平安朝女流日記	與謝野晶子	22	近松名作集上	河竹繁俊								
10	大鏡・五十嵐	力	23	近松名作集下	河竹繁俊								
11	榮華物語	藤村作	24	雨月物語・春雨物語	漆山又四郎								
12	今昔物語	山岸德平	25	八犬傳	白井喬二								
13	保元物語・平治物語	前田晁	26	讀本傑作選	永井荷風								

720
51

終